
アリアドネー戦記2002(外伝 千の雨を越えて・・・)

紅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリアドネー戦記2002（外伝 千の雨を越えて・・・）

【Nコード】

N0823W

【作者名】

紅雷

【あらすじ】

<http://ncode.syosetu.com/n9731r/>（本編）と並行して行われていた戦いをネギま×仮面ライダーWという形で書かせていただきます。一応、本編とリンクさせるつもりですが、その代わり本編はライダー風味が少し薄いです。それでも良い方はどうぞお読みになってください。

はじめに・・・(前書き)

これは千の雨を越えて・・・の外伝小説です。

読むにあたって、仮面ライダーWとネギま、その他のクロスとなりますのでそれがお嫌いの方はどうか読まないでください。

はじめに・・・

初めまして、紅雷と申します。

一部の方は本編「千の雨を越えて・・・」でご存知かと思いますが、このたびはご報告があります。

感想中に仮面ライダーネタは胸やくするからやめてくれ、せめて外伝でやってくれ、早く本編を進めてくれという意見が多数送られてきましたのでこのたびは思考した結果、本編と外伝として分けさせていただくことになりました。

本編とリンクさせるつもりではありますが、本編では大幅に仮面ライダーネタは控える予定です。ただし、とある場面では外伝の設定が必要になるところがございますのでそのところはご理解いただけますと幸いです。

・・・さて、ここで申し上げるのは読者には関係ない事なのですが先日、私の所在をほのめかし「これ以上外伝を進めやがったら殺すぞ」的な内容のメールが送られてきました。もちろん嚴重に対処したつもりですが、また同じようなことが再発しないとも限らないので読者の意見を参考にしたという形で今回は外伝として別に書きます。

私として人の子ですから命は惜しいのです。

それをどうか読者のは理解していただけると嬉しいです。

では、次回から外伝をよろしくお願いいたします。

紅雷。

加速する運命編一序（前書き）

急展開・・・・・・・・

ネギは意外にもファザコン&マザコンだった！！

加速する運命編一序

—————僕は思う、これは逃れられない運命さだめというものなの
だと。

当たり前のように家族とのありふれた日常を歩む日々を……
……奪われたと感じた日からずっとそう思い続けていた。
僕がこの世に生まれることを許してくれたこと、僕の安全を考えて
戦いから遠ざけたことからは多少なりとも愛情を感じられたが、僕
は自覚してしまうほど確実に親の愛情に飢えていた。気付いてから
何度も枕を涙で濡らした。……多分、ネカネ姉さんやスタ
ン村長、アーニャ達がいなかったらもっと酷かったに違いない。
下手すれば自殺なんて考えていたかも。

—————何故僕がこんな苦しみを味わい続けなければならないの
だろうか。

そんな疑問に対する答えなど簡単に見つかった。
全ては母を『災厄の女王』として仕立て上げたメガロメセンブリア
元老院と戦争で無駄な犠牲を増やす原因となった完全なる世界のせ
いであると。

ガトウさんからそれを教えてもらった時は己の欲望の為に母に全て
を擦り付け不幸にし、アスナさんを道具のように扱い好き勝手をし
てきた両者が何故おめおめと存在しているのかと僕は計り知れ
ない怒りを覚えた。

自然と拳からは握り過ぎで血が流れ、これでもかというぐらいに齒軋りをした。

そして無性に両親に会いたかった。

———けど、それは叶わない。

僕が全てにけりをつけるまで甘えることなど許されないのだ。

欲望に塗れたメガロメセンブリア元老院を、世界を危機に陥れた完全なる世界をこの手で倒すその日までは。

———だからこそ、僕は休みを利用して魔法世界へ旅に出ることにした。

目的はガトウさんが追いつけているメガロメセンブリア元老院の不正の証拠を見つけることと、政府に敵対しているレジスタンス・・・悪く言えば、テロリストと接触するためだ。

来年に高確率で再び世界の危機が訪れるというアトラス院からの情報から、僕はそこに必ず巻き込まれているのだろうと予測して事前に魔法世界においてのコネを構築しておこうと考えたのだ。

・・・まあ、上手くいくかはわからないが、何事もやってみなければわからない。

「本当に・・・行くのじゃな、坊主」

「ええ……どうしてもやらないといけない事なので……」

「……まったく、そういう行動力があるところは本当にナギにそっくりじゃの」

昨年に無事、千雨さんのおかげで永久石化から回復したスタン村長の下へ出発前の挨拶へと向かうと肩を掴まれてそう言われた。

「フフ……じゃあ、頑固なところは母さんにですかね？」

「ふっ、多分の？」

冗談交じりの笑顔で返すと強く握手をして、ネギはお願いした。

「ネカネ姉さん達を……よろしく頼みます」

「わかっておる。儂にできるのはお前の帰る場所を守る事ぐらいじやからな、安心して行って来い」

結界も以前より強化しておるしの、と言われて思い出す。

確か、橙子先生が問題点を指摘して張り直しを指示してくれたんだっけ？

「じゃあ・・・・・・・・・・行ってきます」

「・・・・・・・・・・生きて帰ってこいな、ネギ」

「大丈夫ですって、僕は—————そう簡単に死ねませんから」

過去の因縁に区切りをつけるまでは絶対に。

こうして僕は、村を飛び出し魔法世界の学術都市ことアリアドネーへたった一人で向かうことになった。

目立ちすぎる赤毛とこの顔を隠すために変身魔法で金髪になったり
サングラスをかけたりと変装を施したネギは薄手の白いコートに身
を包み、アリアドネーから数キロ離れたモダンな町『ハイペリア』
を訪れていた。

「・・・ここが反メガロメセンブリア政府組織<lor^{ロレム・}em
i^{イプサム}psum>がある町か」

ガトウさんから得た情報によればこの町はロレム・イプサムの拠点
の一つであり、かつてオスティアで生活していた者達（母さんが直
接救助にあたったのを目撃した者達）が多く住んでいるという町ら

しい。

故にメガロメセンブリア元老院がスケープゴートとして母さんを利用したことに對しいち早く反応し、反政府組織として成り立ったという。

ちなみに他にも複数拠点があるというが、この後にアリアドネーの魔法学院のセラス総長に会いに行く予定もあり敢えてここを僕は選んだ。

「一先ずは情報収集といこうかな・・・・・・・・・・」

いきなり接触するのは警戒されると思うので旅人を装っているけど、ここは政府と敵対できるほどの組織力を持った組織がある町。

タイミングよくこの町のリーダーに接触しないと厄介なことになりかねない。

額から溢れる汗をハンカチでふき取りながら、渴いた喉を潤すために近くにあった喫茶店へと立ち寄る。

「ブレイドに3枚!!」

「私は山田に10枚だ!!」

「無茶言わないで下さいよっ!?!」

「全ては美少女の為にiiiiiiiiiiiiiiiiiiii
!!!!!!」

「勝てる気がしないよ!!」

「……なんか店内の広場でバトルしている女装少年(?)と
危ない発言をしている神父っぽい人がいるが僕は気にせずカウンタ
ーの席に座ることにした。

バトルに巻き込まれないためにできるだけ距離を取って。

「すみません、アイスティーを一つ下さい」

「おう、ちょっと待ってな」

貫録有りそうな左頬に傷を負ったこの店のマスターが返事をし準備
に取り掛かる間、魔法世界対応型の携帯「ビートルフォン」に表示
された最新のMM元老院に関する情報を確認する。

「(違法実験施設が存在がある可能性が大か……)」

どんなものを実験していたかは調べてみないと分からないが、違法というぐらいなのだから余程危険な何かを実験していたに違いない。自身が干渉するのは止した方がよさそうだと考え携帯を閉じる。すると、アイスティーを目の前に置きながら僕の持つ携帯を物珍しそうに見ていたマスターと目が合った。

「・・・・・・・・・・どうかしました？」

「いや、それって旧世界の携帯電話って奴だろう？あまりこっちじや持つてゐるやつがないもんでな、つい珍しくて」

「ああ・・・そうですね、こっちじゃ念話とかが主流ですから持つてゐる人は少ないですね」

「って、ことはお前さんは旧世界出身か？うちのご先祖様が旧世界出身なんだけどな」

「はい、その通りですよ。僕は旧世界から来ました」

「へえ・・・・・・・・・・連れはいないようだが一人旅か？」

「・・・・・・・・・・ええ、まあ。アリアドネー魔法学園に用があるんですよ」

マスターの眉がピクリと動く。・・・・・・・・・・何か変なことを言ってしまったのだろうか？

少し警戒態勢を取るために腰を浮かすと肩を叩かれ座るように促される。

「この町はいわばアリアドネーへ行くための検問なんだな、少し話を聞かせてもらってもいいかお前さん？」

「いいですけど……手荒なことはできれば止めてほしいですね」

互いに睨み返し顔を近づけること10秒。
まずはマスターの方から口を開いた。

「何のために行くんだあそこに？」

「騎士団総長に大戦時の話など少々聞きたいことがありますね、それで行くんですよ」

「大層な内容だがアポはあるのか？」

「一応あります」

なら、その話はここで終いだと言って切り上げたマスターは別の質問を切り出した。

「別にここを経由しなくても学園には行こうと思えば簡単に行けるはずだが、何故此処を選んだんだ？……変身魔法まで使つてよ」

「!？」

流石は反政府組織、こちらが変身魔法を使っていることまですぐに感知したか。バレないよう、それでも苦労したんだけどな……・警戒レベルが高いよ。

それにアリアドネーに敵対する意思はなくてもこの町の……ロレム・イプサムと敵対する意思があるのかどうか試しているんだな。こんな質問をわざわざするという事はつまりこの人はロレム・イプサムの構成員……それも第一印象からして幹部以上のクラスの間人なのかもしれない。

「……変身せざる負えないんですよ、僕の元の容姿では目立ちすぎるんで。残念ながら」

「変身せざる負えないね……どうやら、ここで普通に話している内容じゃなさそうだな」

「ええ……こちらにも人がいる場所で《貴方達》について話すのは不味いと思っていたんで……個室、ありますか？」

「わかったぜ……ついてきな」

マスターに促され店の裏側の事務室へと移るネギ。

彼の視界にはスポーツドリンクを片手に持ってソファーに座るボーイッシュな服装をした紫髪の少女が入り込んだ。

彼女もこちらを見て首を傾げている。

「何だカナタ、もう帰って来ていたのか」

「そうだけど、父さん・・・・・・・・彼は誰だい？」

服装だけでなく口調も男の子っぽい彼女は僕を指さして問う。

「・・・・・・・・訳ありのお客さんだ、俺達の『お仕事』について話がしたいんだと」

「なるほど・・・・・・・・で、君の名前は？」

ま、マイペースな人だなこの子は・・・・・・・・いきなり名前を聞いてくるとは。

「とりあえずそれは座ってからにしようぜ、立ったまま話す内容じゃねえんだからよ」

「む、言われてみればそうだな・・・・・・・・すまない、ボクの配慮不足だった」

「いや、別にいいですよ」

さっさと話を始めないと無限ループな展開になりそうで怖いから。

「————さて、お前さんが姿を隠す必要があるって理由・・・
詳しく教えてもらえるか？」

面と向き合っているフランナリア親子（マスターはエイゼ・H（陽
向）・フランナリアという）が腕を組み、僕を見る。

「ここまで来た以上構いませんが・・・あまり言いふらさない
てくださいね」

そんな二人に対し僕はそつと溜息をつきながら懐から自身の本来の
姿、赤毛の自分が映り込んだ写真を取り出し机に提示した。何も知
らない一般人が見ればただの写真だが、魔法を知っている人が見れ

ば次のような反応が見られる。

「っ!？これは・・・・・・・・」

「ナギ・スプリングフィールドに似ているようだけど・・・・・・・・まさか君は・・・・・・・・」

ほらね。

「僕の名前はネギ・スプリングフィールド————息子ですよ。それも千の呪文の男こと、ナギ・スプリングフィールドと・・・・・・・・・本当はオスティア崩壊時に貴方達を助けるために奔走したというのにMM元老院に全責任を押し付けられ処刑されたオスティア最後の女王————アリカ・アナルキア・エンテオフュシアのね」

自然にMM元老院に対して怒りが籠った口調で告げると二人はそれぞれ驚愕の言葉を口にした。

「なん・・・・・・・・だと・・・・・・・・!？」

「本当なのか、その話!？」

「ええ・・・・・・・・行方が掴めている父の友人から直接教えてもらいましたから」

処刑実行時に救出という驚愕の救出劇を食い入るように観たのは今でも忘れられない。

「つまり、お前さんが存在しているってこたあアリカ様は……」

「少なくとも処刑後……僕が生まれた時までは確実に生きていたでしょう。……流石に今はわかりませんが」

ついでと言っては何だけど、一応関連ある事件である……僕が愚かだった頃にMM元老院の反アリカ派の連中が召喚した悪魔達に襲撃された事件についても二人に話す。

「そうか……連中にとってネギ、お前さんは『英雄の息子』ではなく『生き残った災厄の女王の息子』だったってことか」

「君を預けた村ごと襲撃とは……連中、その頃から本格的に狂ったんだな」

元々、MM元老院に対し敵意を持っている彼らは何時にも増してキレているようだ。

弱冠四歳の為に村を壊滅させるなどものはや人のやる事ではないし、彼らの怒りのメーターが上昇するのは当たり前だろう。

「永久石化された村の皆さんは今解呪されて元の生活に戻っていますが、それでも失った時間は大きいです……………」

「永久石化……………上位爵位級の悪魔までいたのか」

「はい……………今はスタン村長によって封印されているので安全と言えど安全ですが……………」

「場合によっては二回目の襲撃が来るかもしれないか……………十分あり得るな」

この町の拠点のリーダーをやっているという（てつきり町長さんがやっているかと思ったが、違うらしい）エイゼさんとその娘さんのカナタさん（15）は真摯になって聴いてくれるので話は円滑に進んでいく。

まさか、ここまでスムーズに事が運ぶとは思わなかったな。（僕は苦労した分報われるタイプなのだろうか？）

「……………携帯の情報では魔法生物を使って違法実験をしているらしいですから、悪魔すら実験体に使っていてもおかしくないのかもしれない」

「連中が本当にやりそうなことだな、まったく……………」

携帯に記された情報を読み取ったエイゼさんが頭をポリポリと掻き呆れていると、カナタさんが口を挿む。

「……………なあ、そういう事ならボク達が調べに行こうか？手が空いている人に声をかければすぐにメンバーは集まるだろうし」

「その提案はありがたいですけど……………知り合いが別ルートでさっき依頼されたらしくて大丈夫だそうです」

「そうか……………でも、その知り合いだけで本当に大丈夫なのか？」

まあ、その知り合いが誰だかわからなければ心配されますよね……………仕方ない、話すでしょう。

「その知り合いは……………父の友人の一人である元捜査官のガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグさんですから大丈夫ですよ」

「な！？」

ガトウさんの名前を出した途端、エイゼさんが固まり数秒後僕の肩を大きく揺さぶった。

うわーーーーー目が回るうううううううううう！！！！

「い、い、生きていたのか、先輩は!？」

「え、先輩? どういうことですか!？」

何か急展開になってしまったんですけど、誰か説明してくださいお願いします。

「実は父さん、これでも元捜査官だったんだよ。それもそのガトウさんの後輩でもあって、死んだって聞かされた時は本当に父さん危なかったな」

凄くやつれていたんだぞ? って、懐かしむような顔で言われましてもね…………正直反応に困りますって。

その後、ダイジェストで通りすがりの吸血鬼お爺さんに助けられうっかりで千雨さんいわく「永遠のおっさん」エターナルなになってしまい、今では偽名で戦っていることを伝えると男泣きをされてしまったので落ちさせるのに時間がかかった。

エイゼさんいい年して泣かないで下さいよ、若者の目の前で……………

――――何はともあれ、こうして僕の魔法世界での第一日は無事(?)に終わった。

??? side

ハイペリアから数キロ離れた荒野に、それ（・・）は現れた。

触角のようなものを二本頭部から生やし、口元は猛獣の牙のような鋭さを持ち粘々とした液体を吐き出しておりゆっくりと町を目指して歩行している。

「・・・・・・ハカ・・イ・・シヨ・・ウ・・キヨ・・・・・・」

戯言のように不吉な単語を繰り返し、それはただ進む。

————— 黒いその謎の生命体は刻一刻とハイペリアに冷たい不吉な風を運び込もうとしていた。

s
i
d
e

o
u
t

加速する運命編一序（後書き）

次回予告

「君は……何を目的として戦っているんだい？」

「最初は復讐だった……けど、今は違う。僕は奪われたモノを取り返すために戦っている」

「夏だっていうのに、嫌な風だぜ……」

「シャアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「何なのアイツ!？」

逃れられぬ運命をその手で切り開け！！

加速する運命編一破（前書き）

ああ、忙しい・・・

テストが迫ってくるわ、いきなりの休講で補講はできるわ・・・

でも、頑張っちえみる！！

加速する運命編一破

『そうか……無事に接触できたんだな、<lore^{ロレム・イ}mi p^{ブサム}>と』

僕はエイゼさんに紹介してもらった宿屋に荷物を降ろした後、シャワーを浴びてさっぱりし定期的に行なっているガトウさんとの連絡を取っていた。

「はい、何とかですけれど………」

『まあ、しっかし……まさかエイゼの奴がリーダーやってるとは思わなかったぜ』

「僕もガトウさんと面識がある方だとは思いませんでしたよ」

こちらとしてはとてもありがたい偶然でよかったけど。

「明日は娘さんのカナタさんに町の案内をしてもらおう予定なんです」

『ほう、アイツも何時の間にか親になっていたとは………機会があったら会いに行つてやりたいな』

「絶対喜んでくれると思いますよ」

男泣きしていたエイゼさんが興奮のあまり飛び上がるほどにね。

近況報告という名の世間話はこれぐらいにして、僕らは違法実験施設について話し合うことになった。

『そういや、ネギ……例の実験施設の件なんだがな』

「ああ……ガトウさんが調査を引き受けてくれる予定の件の事です、ね、どうしました？」

『ちょっと不味いことになりやがったんだ……クルトの奴の情報によるとな——』

ガトウさんが言ったことを掻い摘んで話すと以下のような内容になる。

？こちらが調査する前に正体不明の実験体が施設の外へと運び出された。

？その実験体の仮想敵というか実戦場が実はアリアドネーだった。

？つまり、アリアドネーを攻撃しようとする俗物の一派が動いたのだ。

したがって、まとめるとアリアドネーはかなり危険な状態にあるということらしい。

「……………それって、本気で不味いじゃないですか」

アリアドネーを目指しているということはその周辺の町を通過または攻撃するという事で、下手すればここが狙われる可能性だってある。

どうやら、常時臨戦態勢でいなければならなくなったみたいだな。

『ああ、だからもし見つけたなら優先してお前が倒すよう覚えておいてくれ』

「いいですけど、その実験体のデータはないんですか？」

有れば対策を事前にたてられるから多分大丈夫けれど、無いのなら事が起こってからその場で対策を考案しないといけないから困る。

『詳細なデータは残念がらねえんだ．．．．ただ、一つを除いてな』

．．．．．一つだけって、有って無いようなものじゃないか。その内容が貴重なものでなければもっと無意味になるだろうし。

できればまともな情報であることを祈りたい。

『—————実はな、触角が二本あって鋭い牙を持っていて大量に唾液を出しているそうだ』

．．．．．よかった、外見の特徴についての情報だった。見るからに気持ち悪い奴を探せばいいんだな、うん。

しかし、これで搜索は簡単になったはいけど戦闘スタイルや攻撃手段がまったくわからないままだ。やっぱり、遭遇してから策を講じなければならぬのか．．．．

「はあ．．．．．」

『本当にすまん、調査前にこんな事になってよ』

「ガトウさんが謝る必要なんて全くありません．．．．．悪いのは全て元老院の連中なんですから」

大戦中にタイムスリップして乱入できるのなら、本気で徹底的に壊滅させたい組織だよホント……まあ、できたとして過去は変えられないし今の自分が消えてしまうのは嫌だから止めておくけど。

というか、壊滅させるのなら過去でなくてもいいか。正直今からでも潰しに行きたいが特攻する気は更々ない。地道に潰れるように行動するのみである。

『まったくだ……さつさと老いぼれは去って若い奴に任せればいいものを何時までも残って居やがって……』

「世界を思いのままにするなんて出来るわけがないのに何考えているんですかね？」

この世で欲望によって支配された国が栄えた例ためしはない。だというのに、いい年して何バカなことを考えているのだろうか？

本当に考えるだけでイライラしてくるな、もう……。

「ともかく、臨機応変に対応するしかないのでそちらは調査を頑張ってくださいね」

『おう、任せとけ』

電話を切りベットに長い髪をふわっと揺らめかせながら身を投げ出すと瞳を静かに閉じネギは呟く。

「パーフェクト完全な世界だってないんだよ……………」

なぜなら人は・・・生物は皆、不完全な存在なのだから。

完全な存在などこの世には存在しないし生み出されることなどない。
不完全だからこそ自分達は誰かと寄り添い合い、欠点を補い成長し、
明日を求めていくのだ。

だから、僕は《完全なる世界》が目的としているであろう世界など
誰が何を言おうと否定する。

誰もが笑っていられる夢のような世界など、ただの理想でしかない
し現実味がない。また、そこで生活する人間は果たして本当に幸せ
なのだろうか？優しすぎるであろう僕から見たら『壊れている世界』
で生きていて。

……………僕は嫌だね、そんな世界は。

そもそも、誰かの幸せを・・・人生を犠牲にして創られた世界など
あってたまるか。

「僕は『奪われた僕の幸せ』を自分の手で取り戻す……そう、決めたんだから」

必ず見つけ出して見せるよ、父さん……母さん。

溢れ出る涙で枕を濡らし布団を被って丸くなるとネギは明日に備えて深い眠りについた。

――翌朝。

知らぬ間に暑さで火照った体を朝風呂で冷やしスッキリすると、昨日とは変わって黒いシャツの上に白い革のジャケットを羽織った恰好で宿屋を出る。

目指す場所は町の案内を務めてくれるというアリアドネー魔法学園の2年生（風紀委員長らしい）、カナタさんの家・・・つまりは昨日、町に入っただけに立ち寄った喫茶店である。

急いで駆け足で向かうとそこには既に待ち合わせていたカナタさんが立っていた。

「ん・・・？ ああ、おはようネギ君、速いね」

「カナタさんこそ・・・あ、ひょっとして待たせてしまいましたか？」

「いいや、ボクも今さっき外に出たばかりだからたった数秒のズレだよ。別に気にすることはない」

普通、女の人を待たせたら怒られるのが当たり前だと思っていんだけどな。

やっぱりカナタさんは他の人とは違った感性の持ち主みたいだ・・・
・・・なんか、懂れる。

「それはそうと君の服装は昨日と違ってシンプルで格好がいいな、似合っているよ」

「そ、そうですか・・・？」

千雨さんにお前はもっと格好いいハードボイルド系な服を着ろと言われて買ってみただけど、思ったより好印象でよかった。

「髪が結構長いみたいだけど、そんなに長いと暑くて堪らないだろう。切らなくていいのかい？」

「いえ、特に気になりませんから大丈夫ですよ」

「でも、手入れとか大変なんじゃないか？」

そう言われればそうなのだが、元々生えている髪の色は父さん似でいいとして・・・外見で母の面影を残すものが何もないは嫌だった

のだ。

だから、せめて髪の長さぐらいは母さんのように長くしていきたい。そう思って今の長さをキープしている。

「手入れに手間がかかる程度、どうってことはないですよ」

「そうか・・・君がそう考えているならボクは口を插まないよ」

何処となく感じたネギの強い思いを感じ取ったのか、カナタはその事に対してこれ以上話をしなかった。

暫く町をアイスを食べたりして散策した後、カナタが見せたいものがあると言ってネギの手を引いてある場所へ連れて行く。

「—————ここが町を見渡せる《ロッティーナ大橋》だよ」

カナタが指差した先には先程まで散策していた19世紀の建築物をイメージしたモダンな町が芸術的に並んで見えていた。

そして、その中で緑が失われずに輝きを放っているようにも感じられた。

「……………うわぁ」

思わず口から声を漏らしてしまうほど圧倒的な光景が目には焼き付く。

「どうかな、ここからの眺めは？」

「最高です……………ここまで自然と建築物がマッチしている光景は初めて見ました！！」

「うん、気に入ってもらえて何よりだ」

「はい！」

力強く返答するネギを見てカナタは微笑む。

ネギの今の笑顔は年相応ではなく無邪気に笑う子供のように見え、ネギの現在の年齢が正規の時間で増えたものではないということがよくわかった。

「やっぱりな……………」

「ん、どうかしめたかカナタさん？」

「ネギ君、君は年齢を魔法薬で詐称しているようには見えないけれど……普通に年を重ねてはいないね」

「!!……ええ、その通りですよ。本来なら数えて僕は今年10歳になります」

突然の質問に一瞬驚くもののすぐに受け答えるネギ。

別に隠すつもりもないので詳しい経緯をカナタに向けて話し始める。

「ダイオラマ球で修行に明け暮れていたんですよ、悪魔達の襲撃を受けて少し経ってから」

「すぐにはないんだね……どうしてなんだい」

「最初、僕は復讐しか考えていなかったんです。村の皆にあんな事をした悪魔達をこの手で殲滅することしか頭にね……」

「まさかとは思いますが、最上級の対悪魔殲滅魔法を習得しようとしたりは？」

「……しました」

だが、その途中で気づいてしまった。

自分の父と母に纏わる秘密を、村が狙われた本当の理由を……

・そして、憎しみで戦おうとした自分の愚かさを。
自殺にも見えなくてもない幼い自分の軽率な行為の愚かさを。

「……そう、なんだ」

「自分の過ちに気付いてから僕は、生き残ったネカネ従姉さんや両親を石化された幼馴染のアーニヤをまず守らないといけないと思って精神的にも肉体的にも強くなろうと思ったんです。だから――」

「修行に明け暮れた、か……」

「はい……学校ではほとんどの皆が僕の事を『英雄の息子』扱いでろくな目をしていなかったのもあるんですがね」

自身にも落ち度はあると思ってはいるけれど、周りは自分に期待過ぎで毎日が苦しかった。

クラスメイトはあんまり近寄ってこないし、特別扱いしてくるし。

「ですから、無理を言って校長先生に色眼鏡で僕を見ない先生はいないかって相談したりしたこともあります」

「で、紹介してもらえたのかい？」

「してもらえましたよ。少し訳ありの変わった先生でしたけれど、今ではあの先生の下で修業が積めて良かったと思っています」

戦闘技術の師だけではなく人生経験についての師でもあった橙子先生と出会えて僕は本当によかった。

辛い事は沢山あったけれど、そのどれもが良い経験となって今の自分を形作っている。

また、偶然にも姉弟子の千雨さんとも出会えたおかげで永久石化された村の皆も昨年の夏、無事に元に戻すことができたのでとても感謝している。

「—————じゃあ、復讐を止めて誰かを守る道を選び、ただ只管鍛えつづけたという君はその手に入れた力で今度は何をするつもりなんだ？」

正面を向いてネギを真剣に見据えるカナタ。

そんな彼女に対してはつきりと彼は…………ネギは言った。

「取り戻します—————奪われた両親との日常を、家族との愛を」

愛情を間接的にしか受けられず飢えてしまった自身が戦う理由はただ一つ……ありえたかも知れない両親との輝かしき毎日をこの手で必ず取り戻すことだ。

その為になら僕は正義の道も悪の道も関係なく歩もう、その覚悟はとっくにできているのだから。

「奪還、ね……悪くない理由だ」

「そう言ってもらえて嬉しいですが、ある意味良くもない理由なのかも知れませんよ……悪く言えばただの我儘ですから」

「まあ、そうかも知れないけれど君のように遠く離れている、それも行方不明で生死不明の家族に愛情を求めるのは仕方がないことだよ」

君の場合、母を訪ねて三千里ってレベルじゃないしね？と冗談を交えカナタはネギを励ます。

「やっぱり、生きていることを祈って今はMM元老院と完全なる世界を相手に戦うほかありませんね」

「相手は強大だが、一人で戦う訳じゃない。ボクたちも可能な限り支援させてもらうつもりだからさ、気楽に考えなよ」

「・・・・・・・・善処してみます」

深く背負い込み過ぎるのもよくないのか・・・・・・・・と顎に手を当て思考する。

思えば、責任感がお前は強すぎると先生に言われたことがあったっけ。これからは背負い込むだけでなく吹っ切れることも大事にしなきゃな・・・・・・・・。

また一つ勉強になったお礼にと散策中に人気ある店だと言われたパスタ屋さんにカナタさんに入ると、夏野菜の冷やしパスタを二つ注文し僕は昼食を過ごした。

・・・・・・・・まさか、パスタの冷たさ以上に冷たい風がすぐ傍まで迫ってきていることも知らずに。

「夏だっというのに何だよ、この冷たすぎる風は……………」

エイゼは定期的に行なっている町周辺の様子を確認するために軍の司令室のような広場地下にある巨大な秘密の施設にいたのだが、どうも違和感を感じていた。

それは別に冷房が効き過ぎているからではなくて、感覚的に嫌な感じがするからであった。

「嫌な風だぜ、まったく……………」

軽く上着を羽織ると現在の状況を確認するべく、オペレーターに声をかける。

「何か変わったことはないよな………?」

「ええ、特にはありませんが………どうしましたか?」

「いや、さっきから嫌な予感がしてならないだけだ。気のせいならいいんだがな………」

「は、はあ………」

モニターを見つめ、自身の予感が杞憂であることを祈るエイゼだが、無情にも彼が感じていた予感はおペレーターのまとめ役のディスクの言葉によりの中することとなった。

「!?……………エイゼ、2キロ先にいるブレイド達から緊急連絡よ!……!」

「何だと!?」

緊急連絡は滅多に使われないはずなのに惜しむことなく使われてたこの状態はあまりのも異常事態だった。

『……………こちら山田ですっ!……聞こえますか!?』

「聞こえてるよ!……何があったんだ!?」

『正体不明の魔法生物と現在交戦中です!! 相手は一体だけなんですが……』

「ですが、どうしたんだ!!」

『まったくこちらの攻撃を受け付けないんです!!』

「……現在までに使用した魔法の属性は!？」

『一般的なものは全て試しましたよ!! ……でも、傷一つすら負わせることができません』

広範囲で町の防衛にあたってくれているブレイド軍団の頭脳派女装（不本意）少年、山田のわかりやすい説明を受け敵の情報を整理する。

「（相手は少なくとも魔法障壁を張れて、強固な体を持った効果的魔法属性がないか……そんな魔法生物聞いたことがないぞ!?!）」

「相手の攻撃手段は何なの!？」

『氷系の息吹、パンチ、キックなどです!! 恐らく氷属性が得意な魔法生物かと思われます!!』

「そちらの状況はどう!？」

『神父様と内田さんと姉さんが相手をしていますが、足止め程度にしかなくておりません!!』

ならば、いずれこの町に到達してしまう時が来るかもしれない。

しかし、それだけはこの町の守りを担っている自分たちにとって認めるわけにはいかない事だ。

急いで動ける戦力を向かわせるために近くにいるメンバーを探すと・・・最短距離に実の娘カナタと昨日に自分と出会った少年ネギの反応があった。

「（・・・ネギ、お前さんには悪いが力を貸してくれよ!!）ディスク!!今すぐカナタに連絡を取ってくれ!!」

「わかったわ!!速攻で繋いであげる!!」

素早い手つきで念話のチャンネルを開き連絡を取ると、異常事態を感じ取ったのかすぐさまカナタが応答した。

『父さんどうしたんだ!?何やら騒がしいようだけど・・・』

「データにない未確認魔法生物がこの町に接近中だ!!外回りのブレイド達が応戦しているが突破されるのは時間の問題だ、すぐに向かってくれ!!」

『何だって!?—————わかった、すぐに向かうよ!!』

謎の敵と交戦中のブレイド達の居場所をカナタが冷静になって聞き出していると、その念話にネギが割り込んで口を開いた。

『——————エイゼさん、もしかしてその魔法生物……………触角が二つあって口が唾液まみれじゃありませんか!?!』

「ちょっと、待ってくれ今確認する……………どうなんだ!?!」

『はい、確かにその通りの外見をしています!!』

『……………くそっ、やっぱりか!?!!』

「やっぱりってお前さん、何か知っているのか!?!」

自分達も知りえない敵の情報をネギが知っていると分かり思わず身を乗り出すようにして聞くエイゼ。

すると、ネギの口からはとんでもない事実が語られた。

『……………間違いなくその敵は、MM元老院が極秘裏に研究していた《対アリアドネー攻略用》の違法実験体です』

「な……………っ!?!」

「嘘っ……その話は本当なの!？」

『ええ……昨夜、情報が入りましてアリアドネー周辺の町のいずれかを通る可能性があると言われました。……まさか、昨日の今日でこの町を狙ってくるとは思いませんでしたけど』

いつかは戦って対処しなければならないとは思っていたが、まさかこのタイミングで見つかってしまうとはまったく不幸なのか幸運なのだろうか。

そう思いつつ、現在までの戦況を確認し相手の戦闘データを頭の中に構築する。

『確か……一般的な属性の魔法の射手は全て試したんですよ?』

『え、ええ……そうです』

『それに付け加えて紅き焰、白き雷、春の嵐か……』

そこそこ威力のある魔法ばかりだが、属性がバラバラ過ぎて本当に効果がないのかあるのかが分からない。

ならばとネギは思い、一か八かの方法へ打って出た。

『無茶を承知でお願いします。現在戦闘中の3人で同時に紅き焰を放ってみてください、それで確認したいことがあります』

「おいおい……随分と無茶なお願いだな」

『でも、やってみる価値はあると思うよ』

カナタもネギが事前に用意していたバイク『K1200GT（2002）』（ちなみに免許は年齢詐称葉を用いて取った。）の後ろに跨りつつ援護をしネギの作戦を後押しする。

『相手は氷属性の魔法攻撃ばかり使用する……そこから考えるに氷系を得意とする魔法生物のデータを基にして作られた可能性が高いからね』

「確かにそう言われてみればそうだな……よし、ブレイド達に拘束しつつ紅き焰を叩きこめと伝えたくれ!!」

『了解ですっ!!』

「神父様！姉さん！内田さん！」

「何だ山田あ！？」

「だから山田ではないと言っているだろうがっ！！……ど
うした、クルス！？」

「リーダーから連絡ですっ！！『増援を向かわせている奴からの頼
みだ、3人同時に紅き焰を一度放ってみてくれ』と」

「「！？」」

先程クルスの姉、アルカが紅き焰を放ったことにより火属性の攻撃
は効かないと判断した彼らは驚愕を露わにする。
だが、彼らは歴戦の戦士であるため何となくの意味を理解できてい
た。

「ハッ……要は火力不足かもしれないってことか、火だけ
にな」

「そういうことならやってやるぜ！！」

「クルス、私達は詠唱の準備に入る。その間だけでいい、奴の動き
を封じてくれ！！」

「わかりました!!」

力強く頷き実験体へ向けて紫炎の捕らえ手を無詠唱で放つクルス。
彼が少しでも動きを封じている間に3人はそれぞれ詠唱を開始する。

「ゼン・ラー・クツシ・ター・テーブクロ!!」

「いい加減変えろよその始動キー!? ファイア・バーン・ティア・ヴァーン!!」

「アグニス・ワツタス・エンペラー!!」

「「「ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の微よ、
我が手に宿りて敵を喰らえ（オムネ・フランマンズ・フランマ・プル
ガートウス・ドミネー・エクステインクティオーニス・エト・シ
グナム・レゲネラティオーニス・イン・メアー・マヌー・エンス・
イニミークム・エダット・フラグランティア・ルビカンス）!!!」
」」

瞬間、三方向から同時に灼熱の炎の渦が実験体へと向かう。

「グオ・・・オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

すると、実験体は唸り声をあげてネギの予想通り倒すまでとはいかないものの、以前の攻撃よりかは遥かにダメージを与えられて倒れた。

「よっしやあああっ！！喰らってやがるぜ！！！！」

「見たか、炎のジェットストリームアタックの威力を！！」

「え、何時の間にそんなネーミングになったんだ？」

攻撃がヒットしたことにテンションを上げて喜ぶ暑苦しい男達に呆れるアルカだったが、そうこうしているうちにまだ倒された訳ではなかった実験体が起き上がる。

・・・ボロボロになった装甲を自分で引き剥がし、胸に大きな水色の結晶を露出させてだ。

「まだやる気なのかよ・・・へっ、いくらでも相手になってやるぜっ！！！！」

「何度でも同じ目に遭わせてやるよ！！！！」

男二人がやる気満々なのに対してクルスとアルカは周りの空気の流れがおかしいことに気付いた。

「（妙だな．．．．．胸の結晶が露出してから周りの温度が下がってる）」

初エンカウント時も周りは妙に涼しかったとはいえ、今度は秋の終わりを感じさせるような冷たい風が吹いている。

そんなことに気付かず男二人は再び紅き焰を詠唱して近距離から放とうと接近する。

．．．．．が、それが間違이었다。

水色の結晶に途端に光が収束し始めたのだった、それも急速に。

「なっ!？」

「うおっ!？」

それだけではない、接近していたブレイド達が踏んでいた地面までもが急激に凍ってしまい二人は身動きが取れなくなってしまう。急いで詠唱済みの紅き焰を地面にぶつけて二人は溶かそうとするの

あああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

突如として何処からともなく現れた一台のバイクが飛び出し、その前輪を実験体に勢いよくぶつけたのだ。

突然の衝撃のせいで攻撃を中断され吹き飛ばされる実験体。

その前にバイクに乗っていた二人組が降り立った。……………そう、ネギとカナタである。

「まったく、無茶な運転をするね君は……………」

「どうもすみません……………つい、調子に乗り過ぎちゃって飛ばし過ぎちゃいました」

ヘルメットを外し苦笑するネギ。

しかし、彼の瞳はしっかりと睨みつけるように実験体へ向けられた。

「カナタさん、僕がアイツをどうにかしますので出来るだけ離れていてください」

「燃える天空を使うつもりなのか・・・・・・・・・・？（それなら勝機を見いだせるかもしれないけど）」

「まさか。覚えてもない魔法は使いませんよ」

「じゃあ、紅き焰でも4人・・・いや、5人でぶつけるつもり？」

足元を凍らされている二人を見れば、もはや紅き焰が効果的ではないことがわかる。

だが、それでいてネギは再度紅き焰で攻撃するつもりなのだろうか？

「違います・・・・・・・・・・“僕一人で紅き焰も燃える天空も使わずに倒す”と言っているんです」

「なっ、無茶だそれは!!！」

ネギの無謀ともいえる発言に思わずカナタは反論する。

「折角わかったアイツに効果的な属性を使わないで倒すなんて、いくら君でも——————『無理だと仰りたいのはよくわかります』・・・・・・・・えっ？」

「でも、ここで僕が・・・・・・・・・・【俺】が止まるわけにはいかないんだっ!!！」

そして、ネギはジャケットの懷から1枚のカードを取り出した。

「そ・・・それは、パクティオーカード!？」

カナタの驚きを余所にネギはそのままアデアットする。

一瞬ネギが光に包まれたと思うとその手には小さな赤い何かとバイクのハンドルらしきもの、目の前には地面にめり込む一振りの剣があった。

「しかも、あれは選ばれた人間が手にするというアーティファクトカードですよ!？」

必ずしも仮契約をしてアーティファクトが手に入るわけではないことは魔法使いの常識の中で当たり前の事だ。

故に彼の主が誰かはさておき、『選ばれた人間』であるということがよくわかった。

ネギは左手に持っていたバイクのハンドルを腹の下・・・つまり腰のあたりに押し付けると自動的に黒いベルトを出現させ固定する。

さらに右手に持っていた小さな赤い何かを強く握ったかと思えば次の瞬間、渋い男のような電子音が鳴り響いた。

『ACCEL』

「変・・・身ッ!!」

握ったそれをハンドル型のベルト上部に設けられたスロットに突き入れ挿入すると、再び同じ電子音が鳴りネギは右ハンドルを捻り捻らせる。

周りにはバイクのマフラーがギアのように連なり彼を囲むようにして現れ、そして一つにまとまったかと思えばそこには・・・

―――背部に一つ、足部に二つの車輪を持ち、アルファベットのAをイメージさせる紅き加速の戦士が立っていた。

戦士はめり込んでいた剣を軽々と引き抜き、実験体へと刃先を向け
言い放つ。

「――――さあ、お前の罪を贖え！！！！！」

冷えていた空気を、凍った地をその熱き魂で染め上げ戦士は立ち向
かって行った。

加速する運命編一破（後書き）

実験体はイメージ的にアンデットのジョーカーまたはデイクイド完結編で登場したドラスです。

初めて一万字も書いたよ………

次回はアクセル（ネギ）無双予定。

君はまだ本当のネギまを知らない………

加速する運命編―急（前書き）

覚悟ができているネギ君は一味違います。

そして、ついにガトウ編が次回から始まります。

どうぞ！！

加速する運命編一急

———いつの日の事だっただろうか。

橙子先生は言った、『お前に怒りという感情から逃れる術はない』と。

そして続けて言った、『お前は悲しみによって突き動かされている』と。

そう言われた後、暫く僕はその場に立ち尽くしていた。……自分の行動を思い返していたからだ。

4歳の時の襲撃で沸き起こった憎しみを振り払い修行に打ち込むようになったのだが、何処か感情的になって僕は動いていた気がする。今思えば、それは悲しみであり両親の不在から生まれたものであった。

しかし、結果的に悲しみという原動力を用いて今の自分が創り上げられたので別に良いと感じているが……。果たして、僕が怒りから逃げられないとは一体どういう事なのだろうか？

再度自分に問いかけ思考する。

僕が初めて怒りを覚えた日……それは――

『父と母が下らない欲望によって幸せを奪われた、と分かった日に決まっているだろう……もう一人の【俺】』

「!？」

目の前には橙子先生しかなかったはずなのに、いつの間にか先生は消えて僕と同じ容姿をした【誰か】が立っていた。
突然の事に驚きつつもネギは声をかけてみる。

「き、君は……」

『【俺】か？ 【俺】はお前……怒りから生まれたもう一人のネギ・スプリングフィールドだよ』

力強い眼差しで自分を見つめる怒りのネギと名乗った少年と向かい合わせになって恐る恐る尋ねる。

「怒りから生まれた……僕？」

『そうだ。お前があの日、憎しみという感情を抱いたことに気付いた時に【俺達】は生まれた』

生まれたというよりは分裂して変化したと言った方が正しいけどな、と苦笑する怒りのネギ。

そんな彼にネギはどうしても尋ねたいことがあった。

「どうして今になって僕の前に現れたんだ？ やっぱり橙子先生の仕業なのか？」

『ああ、確かに橙子先生の仕業だな．．．．．といっても後押ししてくれただけのようだ』

つまり、橙子には最初からネギにもう一人内包する何かが存在しているとわかっており、何かしらの目的の為にわざともう一人のネギを目覚めさせたのである。

「今の僕は悲しみから生まれたか．．．．．」

何だか喜ぶ気にはなれないな．．．．．はあ。

『そう悲観するな。憎しみよりかは遥かに良い』

「ネガティブなものには変わりないんだけどね……」

完全にネガティブという訳ではないけど、思い返せば何処か僕は物事に悲観的であった。

「————で、橙子先生は何をしようとしているんだろう？」

『それはだな……これはあくまで予想だが、《スイッチ》を作り出そうとしているんじゃないか？』

「《スイッチ》？……というと、先生が眼鏡の有無で性格が変わるアレの事だね」

眼鏡をかければ優しいお姉さんの性格になり、かけなければ冷徹なサディステック(?) 女性的性格になるのを何度か見たことのあるのでよく覚えていた。

まあ、二重人格というより、擬似二重人格と言った方が正しいだろうか。

『普段は今のお前のような性格でいいとしても、戦闘面ではまだまだ甘いところがあるからな。そこをどうにかする為に【俺】を目覚めさせたんだと思う』

「じゃあ、君は僕の戦闘時の人格ってことになるのかな」

『おそろくはな』

事実、自分はまだ未熟で甘いところがある。

弱さを捨てきれずにただ悪あがきをしているだけのような感覚さえる。

そんな自分を変えたい、その思いが次第に僕の中で強くなっていた。

———だから、僕は……【怒りの自分^{おれ}】を受け入れる
ために彼の手を握った。

パクティオカード、それもアーティファクトカードを変化させ紅き戦士へと姿を変えたネギは右手に20キロもある剣『エンジンブレード』を握りしめ実験体へと斬りかかる。

「はあああああっ!!」

「グオツ!？」

装甲が剥がされてもなお硬い体でその一撃を受け止められるも、間髪入れず再度斬撃を加えていく。

また、それだけではなく蹴りも入れて反撃できないように連続的に攻撃を続けた。

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

「.....せいっ!!」

対する実験体も装甲が剥がされたことによりスピード性が上昇したのか、機敏な動きで対抗して強い冷気の籠ったパンチやキックを放つ。

両者の動きはもはや魔法使いの戦闘とは言い難く、言うなれば「リ

ングが存在しない格闘戦」のように見えた。

「嘘だろ．．．．．アーティファクトだけで俺達が苦戦した奴と渡り合ってやがるぜ」

「俺達を拘束していた氷までも溶かしやがるとはアイツは一体．．．．．？」

凍った地の束縛から変身の影響を受けて脱出することができたブレイド達二人は邪魔にならないよう距離を取り、戦い続けるネギを見つめる。

．．．．．いや、二人だけではない。その場にいた誰もがその戦いに見入っていた。

「（ネギ君．．．．．君は．．．．．）」

実験体は無茶苦茶な動きでネギに襲い掛かり掴みかかろうとするが、

それを難なくネギは蹴りを入れることで吹き飛ばし距離をつくる。再度同じように掴みかかろうと実験体は試みるも軽やかなステップで回避し、逆に素早く威力のある拳と刃を連続的にぶつけていく。

「・・・・・・・・遅いな」

橙子の下で日本において基本的な体術を学び、自身の力で体術を生み出した彼にとって実験体の動きは赤子のように感じられた。

しかし、あくまで動きだけなので息吹による攻撃に注意し目の前に躍り出る。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!」

だが、注意した矢先に氷の息吹が至近距離からネギへと降り注いだ。

「おいおい、やばいんじゃないかあの距離じゃ!?!」

「直撃だぞ!?!」

心配した二人が慌てるものの、アルカは冷氣に包まれたネギの姿をよく観察しある事に気付く。

「バカ、よく見てみろ!!!あの少年に・・・・・・・・奴の攻撃は効い

ていないっ!!」

「「はぁ!?! そんな馬鹿な………」」

口をそろえて何言ってるんだと答える二人であったが、よく目を凝らすと………信じられないものが目に映った。

—————ネギが燃えていたのだ………全身を炎で包んで。

「………やはり俺のこの熱、この炎はお前に有効的だったか!!」

炎に包まれながらネギは叫ぶ。

実はブレイド達と実験体との戦いから炎による攻撃が有効的だと確証を得ていた彼は咄嗟に右のハンドルを握り捻っていたのだ。

その燃え盛る炎の温度は紅き焰を楽に超える熱さで、生身の人間に使用すれば人体を溶かしきり跡形もなくすほどである。

なので、それほどの熱にいくら強力な氷による息吹も無意味と化していた。

同時に灼熱の夏を感じさせる熱風が吹き抜け、実験体を怯ませ後ずらせる。

「・・・・・・・・チャンスだ!!」

その隙をみすみす見逃すわけがなかったネギは今度は一時的に炎を発生させる右グリップのちょうど反対側・・・・・・・・左グリップの下にあるレバーを強く握りしめる。

『ACCEL! MAXIMUM DRIVE!!』

そして、先程と同じように右グリップを再度捻る、捻る、――――
――捻る!!!!!!

「――――うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおっ!!!!!!」

激しい炎に包まれると共に踏み込みの構えをとり、一気に地面を踏みしめ跳び上がる。

右脚にエネルギーを溜めこみ、悪あがきとばかりに冷気を排出する実験体を前に時計回りに回転し一度背を向けると、35tもする後ろ跳び回し蹴りが実験体へと襲い掛かった。

「アクセル、グランツアアアアアアアアアアアア！！！！！」

紅く燃えるタイヤ痕が水平から吸い込まれるように刻まれ叩きつけられる。

・・・・・・その一撃は、相手の身体を粉々に砕くほどの破壊力を持っていた。

———いや、いくら何でもそんなはずはない。ありえるはずがなかった。

「・・・・・・ちっ、分身か！！」

そう、実験体は直前に排出していた冷気を使って逃亡をはかると同時に分身体を創っていたのだった。

攻撃が不発に終わってしまったことに少しばかり苛立つも、ネギは

すぐに冷静さを取り戻し辺りを見回した。

すると、カナタが単純に逃亡していたと思われた実験体を500mほど先に見つけた。

「左だっ!!……奴は迂回してまで町に向かうつもりなんだ!!」

「何だって!?!」

見れば地面を凍らせてスケートをするが如く動きで、移動している実験体の姿が左の方にあつた。

このままでは確実に町に到達してしまうのも時間の問題となってしまう。

それだけは絶対に回避しなければならない事だと全員が感じ、急いで向かおうとした時————ネギは咄嗟にAと刻まれた紅いメモリからEと刻まれたメタリックな色のメモリに入れ替えてハンドル型のベルトを外し駆けだした。

「何をするつもりだ君は!?!」

「決まっている……追いかけるんだ!!」

外したベルトを前に突き出し跳ぶと背部に備え付けられた車輪が前方にせり出し前輪となる。

さらに、両足の踵に有った車輪がお互いを接合し一つの車輪と化し後輪となった。

[illegible]

なんと皆の驚愕の絶叫を余所に変形を完了したネギの姿は……

・一台の紅いバイクだった。

その姿に一瞬、カナタは一緒に乗って来たバイクの意味あったのか
 なの思ったが、轟くような音をたてマフラーから炎が飛び出たこと
 で我に返り思考を切り替えた。

「――振り切るっ!!!!!!」

ハンドルを握り、爆発的な速さで発進したネギは全速力で実験体の後を追って行った。

発進してから僅か数十秒で徐々に距離はどんどん縮まっていき、実験体とネギとの間の距離は5mという距離まで達していた。

そこでネギはラストスパートにとさらにエンジンを吹かし加速する。

しかし、あと4m、あと3m・・・ときた所で実験体は更なる変化を遂げた。

背部から隠されていた翼が危機的な状況下であると判断したのか広げられたのだった。それにより、当然のこと実験体は飛行能力を手に入れ空へと舞い上がる。

「逃がすものかつ!!」

負けじとばかりに前輪を上昇させてロケットの如く飛び出し躍り出る。

そして今度こそと左レバーを握りしめて再びマキシマムドライブを発動させる。

『ENGINE! MAXIMUM DRIVE!!』

全身を炎で包み込んだまま実験体目掛けて突っ込み、そのまま地面へと轢き飛ばす。

変形し人型へと戻ったネギが着地しそれを背にし止めの言葉を呟い

た。

「―――――感じろ、お前の贖いの痛みを!!!!!!」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!」

刹那、背後で爆発音が鳴り響く。

実験体はまともに攻撃を喰らったことにより死亡し、四肢があらぬ方向を向いていた。

その事から結果的にネギは実験体を『殺した』ということになるのだが、そうしなければ実験体は止まることなく町に向けて破壊活動を行っていただろう。

要らぬ犠牲を生み出していたことだろう。

……そして、実験体自身永遠に汚い仕事をさせられてその命を落とすことになっていただろう。

そうなる前に出会え、せめて葬ることができたのは皮肉だが「幸い」だった。

この先は歩むことになるであろう道の為にも……………

「・・・・・・・・ネギ君」

いち早くネギに追いついたカナタがアーティファクトをアベアットし元の姿へと戻った彼に駆け寄り声をかける。

その姿を見てネギは遠い彼方を見つめながら呟いた。

「カナタさん・・・言わんとしていることはわかっています」

結局、自分は何でもかんでも自分で解決しようとする。

誰かが傷つくのを見たくないから、誰かが死ぬのを見たくないから、大切な人を奪われたくないから・・・背負い込む。

たった一人で苦痛に耐えながら、許されない道に行くことになろうとも。

「君は・・・平気なのか、その生き方で・・・・・・・・」

「平気と言えば嘘になります・・・・・・・・でもね、その生き方じゃない僕も僕はただの化け物になるんですよ」

闇に墜ちた破壊者という名の化け物にも光を行く俗物という名の化け物にも僕はなりたくはない。

僕はただ・・・どんな形であっても大切な人をこの手で守りたいだけだ。

「・・・・・・・・闇も光も君にとっては関係ないんだね」

「・・・・・・・・ええ、その通りです」

険しい道であろうが僕は・・・・・・・・【俺】はその道を突き進んで、自身の目的を貫き通して見せる。
そして掴み取って見せよう、幸せなの未来というものを・・・・・・・・

「—————なら、ボクはボクなりのやり方で君を後押ししよう」

「・・・・・・・・えっ？」

次の瞬間、頬に何かが触れた感覚した。

ギギギッ・・・・・・・・と首を右に動かすとカナタの顔がすぐ近くにあり、彼女の付けていた柑橘系の香水の匂いがする。

「い、いま、何を・・・・・・・・？」

「・・・さあね？ご想像にお任せするよ♪」

妙にご機嫌なカナタの姿に戸惑っていると遅れてやって来たブレイド達がやってくる。

「うおおおおい！！その超絶変形男の娘！！！！」

「何ですかそのネーミングは！？」

いつの間にか変なあだ名がつけられていた。

まあ、自分の姿やあんな変身を見たらそう言われるのも仕方がないのだが、いくら何でもネーミングがおかしい。

「だって君の名前を私達は知らないんだぞ？だから――――」

「この二人が勝手に思いついたんですね、はあ・・・」

「仲間の僕たちでさえ『山田』で固定状態なんですよ？女装は強制されるし・・・」

ブレイド軍団でまともそうな山田姉弟(?)に説明と慰めを受ける。
・・・クルス君、だから君はそんな姿をしているんだね。思
わず肩を握ってしまったよ。

実験体を回収しつつ僕は町へと騒ぎながら帰還した。

「……………まったく、お前さんに貸しができちゃったな」

帰って来て開口一番にエイゼさんはそう切り出した。

「いえいえ……ブレイドさん達の協力がなかったら上手くいく確証も得られませんでした、ありがとうございます」

「礼を言うのはこっちの方だ、危うく町が・・・アリアドネーが大変なことになるかもしれないかったんだからな」

倒してくれて本当にありがとうと頭を下げるエイゼさんの姿に僕は戸惑う。

「・・・・・・・・倒すというより、殺したという方が正しいんですけどね」

「若い奴がそんな堅い事を気にするな。あれは正当防衛なんだからな？」

「確かにそう言えばそうですけど・・・・・・・・」

この町やアリアドネーにとってはそうかもしれない。

けど、僕が生きていた実験体を殺したという事実は消えることはないのだ。

暫く腕を組んで沈黙する。

「・・・・・・・・ところで訊きたいことがあるんだが、いいか？」

「は、はい！」

3分ほど沈黙していた僕に突然エイゼさんが声をかけ、びっくりし

ながらもレモネード片手に返事をする。

「カナタと・・・どこまでいった？」

「ぶはっ!？」

口に含み飲みかけていたレモネードがコップの中へと逆流する。
幸いにもエイゼさんに直撃しなかったのによかったが、おかげでほんの少しレモネードが冷たくなってしまった。

「な、な、な、何を言っているんでひゆかエイゼさん!？」

いけない、焦り過ぎて滑舌が悪くなってしまった。これじゃあ余計に怪しまれるぞ!？」

「ほう・・・その慌てっぷり、何かあったんだな」

遅かった!! というか、もうバレバレだああああああああああああああ!!
これはもう、正直に話すしかない!!

「そ．．．その、頬に一瞬柔らかい何かが押し付けられまして．．．．
．．．」

「おお．．．．．キスとはまた大胆だな、カナタの奴」

そうだよお！！いきなりで大胆すぎるよ、カナタさん！！
唇じゃなかったのはこちらとしてはありがたいんだけど、頬は不
意打ちだよ！！

「．．．．．ファーストキスは死守できたのでよかったんですけど
ね」

「え？キスの経験ないのかよネギ！？．．．てっきり、パクティオ
ーカードがあるからしてるもんだと思ったぜ」

仮契約がキスだけでしかできないと思うな！！こっちは血を使った
んだよ、血を！！

「契約者の相手が訳ありの人でしたから．．．．．」

姉弟子の唇をそう易々と奪えるものか。
というか、千雨さんの方から言わない限りキスなんて契約に使わな
いよ！！（まさか、来年にキスで契約を結ぶことになるとは知らな
いネギであった）

「さてと・・・ガトウさんに無事に仕事が終わったことを報告しないとな」

エイゼさんから何処で食事したとか何処を巡ったとか、散々聞きだされて心がボロボロになったネギは一息ついた後に今回の件の報告を行おうとしていた。

だが、電話をかけようとしてその瞬間――――ガトウの方から電話がかかってきたので急いで応答する。

「はい、僕ですが・・・ガトウさんどうしました？」

まさか、緊急事態が発生したとかじゃないだろうな？

『・・・ネギ、突然ですまないな。こちらとしても報告したい事があるんだが、そっちで何か変わった事が有るのならそちらから話してくれ。こっちの話は長くなるからな』

「へ？あ、ああ、はい・・・」

何やらガトウさんの方で何かあったことは確からしい。

恐らくは違法研究所の件だろうが、その長くなるという話を聞いてみない事にはどうしようもなかった。

だから、とりあえず簡潔的に実験体を倒したことを伝えた。

『そうか、やはりハイペリアの向っていたのか……ご苦労さん』

「いえ、現地の協力者の皆さんの助けがありましたから成功したよ
うなものです」

『で、その実験体の遺体はどうなる予定なんだ？』

「一応予定では、この町で簡易的調査を行った後にアリアドネー魔
法学園にて本格的な調査に移るらしいです」

その際に、カナタさんと一緒にアリアドネーへ実験体を運びながら
行くことになったけどね。

『なら、丁度良い。こっちもアリアドネーに向かっているから合流
できるな』

「そうですね。予定よりかは早いですけど」

ガトウさんの丁度良いという言葉に軽く妙な感覚を覚えながら返事
をする。

その後は合流云々の詳しい日程などを話し合い少し和んだ空気になりかけたのだが、急に話を終わらせガトウさんはガトウさん側で起こったという話を切り出した。

こちらに緊張が走る。

『・・・・・・・・いいか、よく聞けよネギ。実はだな研究所で――――
―――― たんだ』

「――――え？」

ガトウが話した内容によってネギの思考がフリーズする。
その内容はネギにとってすぐに処理できるような内容ではなかったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『いきなりで本当にすまない・・・・・・・・けど、こいつぁお前には絶対について話さないといけない事だからな。下手に隠したくはなかったんだ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『酷な内容だ……やっぱり、電話で詳しい話を話すのは止めた方がいいよな。電話を切った後に添付ファイル付けて送ってやるから、詳しくはそっちを見てくれ』

お前の気持ちの整理もそっちの方がつきやすいだろうからと言ってガトウは一言二言話し電話を切った。

そして1分程してネギは意識を現実に戻し、狂ったようにメールを確認し始めた。

その様子にエイゼはただならぬ気配を感じた。

「ど、どうしたんだネギ？先輩からの連絡だったみたいだがよ……」

恐る恐る声をかけるエイゼ。

だが、そんな彼を気にせずにネギはメールに添付されたファイルを一心不乱になって読み進め、完全に読み終わると静かに携帯を胸ポケットにしまい……

————ダンッ！！！！

カウンターに二つの拳を叩きつけ叫んだ。

「……そままでして——何が『正義の魔法使い』だ、メガロメセンブリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

」

少年の怒りを込めた絶叫が喫茶店内に響いた。

ガトウ編に続く

加速する運命編一急（後書き）

流離う骸骨編一ガトウ編予告

「よお、しばらく見ないうちに老けたなクルト」

「あ、貴方は・・・そんな、死んだはずでは!？」

「ケリをつけるまで死ねるかよ・・・・・・・・」

再会から数年、男はある依頼を受ける。

「違法研究所の調査か・・・・・・・・楽な仕事じゃなさそうだな」

「ええ・・・ですが、元老院の不正を暴くいい証拠にはなるかと思われます」

男は一人、霧に包まれし研究所に向かうが・・・そこで運命の出会いをするとはまだ思っていなかった。

「・・・こんな計画を奴らは実行に移していたのか!!」

そして、知られざる恐るべきMM元老院の陰謀とは果たして一体!？

「――――さあ、お前らの罪を・・・数えろ!!」

・・・ハードボイルドな男の物語が今始まる。

流離う骸骨編一起（前書き）

大学から更新。

いや・・・本来は休みなんだけど台風のせいで。

しかも、社会学の先生がアホなせいで5時限目まで待たされる羽目に。

1時限目 微分積分演習

2～4時限目 超暇な時間

5時限目 （元何処かの市長さんな講師の）社会学

となっております。

どうしてこうなった。

7月24日、3話で終わりそうにないので序破急から起承転結へ変更。

流離う骸骨編一起

————それは遡ること1年半前の話である。

ネギがまだ橙子の下で修業を積み、千雨が麻帆良に戻る準備をしていた頃、ガトウは政治家の道を行ったかつての仲間であるクルト・ゲーデルに魔法世界崩壊の回避の方法があることを何とか伝えるために密かに独自に動いていた。

コンタクトを取るために情報屋の下へ何度も通い粘り続けること約2ヶ月、政府内の少数派組織である『青年政治戦略研究会』の手を借りることに成功し話し合いの場を持つことができた。

クルトside

「・・・はい？私に匿名の手紙ですか？」

秘書を務めてくれている少年から手渡された手紙の封筒には宛先で

ある自分の名前だけしか空いておらず、差出人は『G』というイニシャルしか記入されていませんでした。

「一体誰が・・・・・・・・？」

「過去に提督宛てに書かれた手紙の中に一致する筆跡はありませんでした。無論、『G』というイニシャルに該当する人物もいません」

「そうですか・・・・・・・・」

仕事やプライベート関係ではないということですかね。

よくファンのだという方から手紙を貰うことがありますが、少なくとも自身の名前ぐらい書きますし・・・・・・・・

疑問に思いながらも開けてみない事にはわからないので、呪い等がかけられていないかチェックし終えた後に開封してみることにしました。

「どれどれ・・・・・・・・」

幸い、脅迫や悪戯等などの危険性はないと判断されたので開封した私ですが、手紙に書かれていた内容はたったの一文と謎の名前でした。

『アイタイ、セカイスクウスベアル、シテイノバシヨニヒトリデコ

ラレタシ by きちからな』

「……………最後だけ日本語で、それに世界を救う術があるのだと？」

魔法世界崩壊については政府のごく僅かの人間しか知り得ない真実であり、魔法世界に住む一般人には一切知らされていないはずだ。戦争が真に終わらなかった原因の一つでもあるこの事実をこの『きちからな』というふざけた名前の人物は何故知り得たのだろうか？

「いや、待ってくださいよ……………素直に名前を書かないしわざわざ日本語を使ったということは」

何らかのアナグラムなのかもしれない。

そう思った私はまほネットであらゆる可能性を考え調べてみた。

そして、一文字ずらしに始まりアルファベットに変換するなど試み続けて数時間……………私はある法則を導き出した。

『き』はキーボードにおいて『G』と同じ場所に存在する。

『ち』は『A』、『か』は『T』、『ら』は『O』と同様に続けていくと最後の『な』を『U』と変換できる。

つまり、『G』『A』『T』『O』『U』……………『ガトウ』となるのだ。

「そんな馬鹿な・・・・・・・・あの人は死んだはずだ!!」

思わず叫び、その事実を否定しようとした私はふと思い返し気付いてしまった・・・・・・・・死体は誰も確認はしていなかったということ。

もし、万が一ガトウさんが生き延びていたのなら公式では死亡しているのでこういった回りくどいコンタクトの仕方をするのかもしれない。そんな僅かな可能性に私は何故かかけたくなってみた。

「それに魔法世界を救う術・・・・・・・・もしかしたら本当に知っているのかもしれない」

今まで生きていると連絡せずに行方を眩ませていたのなら何か方法を思いついたのかもしれない。

もしくはその術を持つ人物に出会ったのかもしれない。

「・・・・・・・・まさか《完全なる世界》に加わってるなんて展開は止してくださいよ?」

今日の分の仕事を手早くまとめると、そんなありえるはずもない可能性にならないことを祈りつつ私は一人で指定されたセキュリティ

が徹底された高級レストランのあるホテルへと向かうことにした。

side out

ガトウside

——そして、2002年現在（ネギがハイペリアを訪れる
1日前）。

「・・・思い返せばあの時のお前の顔は笑ったなく、口をあんどり
開けて見つめてくるんだからな」

男達は再会した時と同じように同じ場所で語らっていた。

「仕方ないでしょう!! 貴方、全然年とっているように見えなかったんですから!!」

ナイフで肉を切りつつ怒るクルト。

そんな彼にガトウはまあまあと落ち着くように懷から何かを取り出す。

「とりあえず、この濃縮ハバネロドリンクでも飲んで落ち着けよクルト」

「ええ………って、何でものをさり気なく飲ませようとしてるんですか!? とうか何でそんなものを持ってるんですか!?!」

「知り合いの極道に貰ったからだが……何か?」

「その極道も何で持っているんだあああああああああああああああ
ああ!?!」

飲まなくても興奮するクルトを今度は冗談抜きで落ち着かせようとハーブティーを注文する。

ちなみにドリンクはそのままクルトに無理矢理プレゼントした。彼が飲まなくても彼の同僚の誰かが飲んでくれることだろう。

そして注文してから数分、やっと運ばれてきたハーブティーがテーブルに置かれると両者は先程とは打って変わって真剣な顔つきをしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で睨み合うかのようにお互い視線を交わすクルトとガトウ。
まずは、クルトから口を開くことになった。

「・・・・・・・・・・例の研究所の噂なんです、どうやら本当に実在するらしいです」

「そうか・・・・・・・・それで具体的な実験内容とかはわかっているのか？」

「現在判明しているのは魔法生物の遺伝子データを多数組み合わせた実験生命体を研究しているというぐらいですかね・・・・・・・・」

もう少しでもっと詳しい情報が得られる予定ですが、と彼は首を横に振って答える。

「・・・・・・・・研究所の場所はわかっているのか？」

「それはもちろん優先的に調べましたから特定してありますよ・・・・ただ、内部構造は掴めていませんけど」

「なら、明日あたり偵察に行ってみるしかないな」

外部からの偵察は自分で行い、内部は小回りが利いて気づかれにくいであろうスタッグフォンに任せるしかないだろう。
潜入はそれらを行ってからだ。

「問題は内部に何人ぐらいいるかだな、多すぎれば潜入は困難になるしよ」

「一部の高官や議員の私兵が主ですのでそこまで多くはないと思いますが気を付けてくださいよ？いくら不老とはいえ不死じゃないんですから」

「わかってるって・・・・・・・・」

宝石爺に助けてもらったのはよいが、今でも血筋である遠坂に引き継がれている『うっかり属性』によってアスナ嬢ちゃんをタカミチに託した時の姿のまま俺は未だ生きている。

老衰による衰弱死やなどはまずありえなくなってしまう、外傷を負わなければ死ねないのは喜んでいいのかわからないがそれでもアスナ嬢ちゃんの未来が守れるのなら良しとしよう。

ナギがない今、俺がやらなくちゃいけない事だしな。

食事を終えたところで今日はお開きとなり別れることになった俺はクルトに「情報を追って連絡しますのでそれまでに絶対死なないで下さいよ、せっかくの苦労を無駄にしたくはないんですから・・・」と心配してるんだかしてないんだかよくわからないことを最後に告げられてホテルの一室へと戻った。

「・・・・・・・・さてと、明日の準備に取り掛かるとするか」

下準備を終えた後にサポートメンバーの明智裕（もちろん偽名）へ連絡を取り、その日の俺の一日は終わった。

s i d e o u t

???
s i d e

黒く濁った銀色の繭の中で少女は溢れ出す感情・・・負の感情に身を委ね、身体を抱きしめる。

少女が繭の中に籠る前に見たのは今まで自分を支えてくれた心優しき仲間たちの・・・物言わぬ姿と、それを嘲り笑う白髪

の男の仲間たちであった。それを狂ったかのように見せつけられた彼女は声にならない叫びと共にその惨状を遮断したのだ。

「■■■■さん・・・■■■■さん・・・■■■■・・・」

呪詛の如く犠牲になった者達の名を呟き続ける■■■。

もはや彼女には人間としてあるべき何かが欠落し始めていた。

そんな彼女の前に金髪の少年が現れ言葉を告げる。

「—————まだ一人生きているじゃないか、お前の大事な人という奴がな・・・」

少年が指差した先には渦巻く光の中で捕らわれている、自分が守り

通さねばならない王子様のような恰好をした少年がいた。

「さん。さん。さん。さん。さん。さん。さん。さん。さん。」

縋り付くようにしてその姿を目にする少女の背後に立ち、さらに少年は語りかけた。

――闇に身を委ねろ、さすればお前はあの男を救える。

!!

少年の発言に対しハツとなると少女は溢れる涙で地を濡らした後・
・・・美しかった瞳から光を消し去り、完全に人としての器を破
り去った。

「—————全てが憎い、私の『全て』を奪った者達全てを消し去りたい……………!!!!!!」

阿修羅のような形相で顔を上げ、外で未だに笑う者たちに姿を睨むと自分で創り上げた繭を爪で勢いよく――――斬り裂いた！！

[illegible]

握る手の強さを強めギシギシと男の身体を軋ませる。

対する男も必死に抵抗を試み足をじたばたと動かすも無意味と化す。

なぜなら、男の胸には・・・・・・少女の腕が生えていたのだ。

「――があ！！」

「・・・・・・消し炭にしてやろう」

ちらりと後ろを見てしまった男はその言葉を吐き出した少女の瞳に
気付く。

その瞳は幾度となく続けた戦いの中で見た少女の瞳とは違い美しく・
・そして澱んでいた。

「・・・・・・消えろ、人形」

静かに紡がれたその言葉で男の思考は完全に停止し黒き炎が燃え広
がった。

歪んだ唇でその光景を見つめた後、彼女はフードの姿の男に向けて
投げ捨てた。

「貴様ああああああああああ！！！！！！」

激昂した表情で無数の拳を高速で少女に向けて叩き込むフードの男。彼こそが少女の仲間を死に追いやった張本人であるのだが、そんな彼ですらも今の彼女と戦える相手にはなり得なかった。

「・・・・・・・・クスッ、ゴキブリ並みの遅さ」

「!?!」

迫りくる拳を捌くのではなくただ避け続けると、一瞬の隙を突き懷に飛び込み容赦のない煉獄の炎が籠った拳が叩き込まれ男を遠くへと吹き飛ばす。

しかし、それでもまだ少女の攻撃は収まることはない。彼らがいた場所に渦巻いていた光の渦は徐々に少女の下へと集まっていく。そして同時に捕らわれの少年も拘束から解き放たれた。

その中で、少女は辛うじて生きていた一人の仲間の存在に気付きアイコンタクトを取る。

「（後は・・・・・・・・任せましたよ、■■■■さん・・・・・・・・）」

「（ッ・・・・・・・・・・・・・・・・!!）」

仲間は涙に堪えつつも少女と交わした約束を守るためにバランスを崩しながら突き進み、片腕しか動かないのにもかかわらず抱きかか

え戦いの地から離れていく。

その姿を確認した彼女は親指を噛み血を垂らすと無数の鎖を生み出し魔法陣を形成する。

「————結局、両親と同じ救いを私はもたらすことなんて出来なかった……。けど、ちゃんと最後まではじめはつける……。つけてみせる!!」

空を覆い尽くすほどの魔法陣が展開され決戦の地に照準が向けられる中、少女は最後の決意を叫び……。放った。

「Az^{アジ}i————Da^ダha^{ハー}ka^カ!!!!」

それは一つの物語の終わりを告げる最後の魔法。出来るなら使いたくもなかった禁じられた魔法。自身の身を滅ぼして全てを破壊する悪魔の魔法。

そんな魔法を彼女は躊躇いもなく使い、周りを黒き世界へと塗り変え憎むべき敵の存在を消去する。

「■■■■え————!!!!」

仲間は■■■が守ると誓った少年を強く抱きしめ絶叫した。

—————その後、彼女は四名の生存者を命と引き換えに守り、その身を世界から消失させた。世界を救う方法を遺言として仲間
託して・・・・・・・・・・

新たに紡がれる物語へと誘^{いざな}われた。

s
i
d
e

o
u
t

流離う骸骨編一起（後書き）

最後は昔書こうと思った話をベースに書きました。
結構バットエンドっぽい内容です。

で、登場している人物に関しましては後日更新いたします。
予想がつく方が多いかと思いますが。

次回、流離う骸骨編一破

潜入までのプロローグに偽名の人が登場。

果たして誰なのだろうか！？・・・ちなみに女性です（既婚者）

流離う骸骨編二承（前書き）

大学から更新。

今日は五時限目にキャリア開発講座なるものが・・・

正直面倒です。ですが、単位のためなら出席せざる負えない！！

久しぶりに千雨の登場回です。超展開で毎度ごめんなさい。

流離う骸骨編一承

千雨side

「・・・・・・・・・・ちゃ・・・・・・・・め・・・・・・・・ちゃ・・・・・・・・」

—————誰かの声が聞こえる。

何処かで聞き覚えがあるその誰かの声が誰かを呼ぶ、そんな声が近くで。

「ちさ・・・・・・・・・・ちゃ・・・・・・・・・・千雨ちゃん!!」

「・・・・・・・・・・うわっ!？」

肩を揺すられながら飛び起きてみればそこにはクラスメイトで親友の明日菜の姿があった。

彼女は心配した目で千雨を見つめている。

「はれ・・・・・・・・?ここは・・・・・・・・」

辺りを見回すと学園内にある広場だった。

どうやら気付かないうちにベンチに座って私は眠っていたようだ。

「・・・もう、心配したわよ千雨ちゃん!! まるで死んじゃったみたいに動かないんだもん!!」

「え、マジで？」

「大マジよ!! しかも髪がなんか薄っすら発光してたし・・・とにかくこんなところで一人で寝てちゃだめよ!!」

指をビシッとさして注意するアスナ。

彼女の発言から千雨は自身がどんな状態にあったかを理解する。

「（またあいつが出てきていたのか、気付かないうちに）・・・・わかってるよ。それに今回は疲れてつい眠っちゃったみたいなかだけだからさ」

「疲れてるって・・・・あぁ、ごめん。連日修行に付き合わせただけだったもんね」

「（確かにそうだったな・・・・）いや、謝らなくていいよ、こっちの体調管理不足なんだからな」

そういえば最近、ぼけーっとなることが増えて来たな自分。警備に参加してやったりあったりこっちで修行に付き合ってたたり

と色々忙しいからなく、疲れが本格的に溜まってるみたいだホント・

「桜咲さんといっしょと・・・新必殺技の特訓してるんだっけ？私の修行は暫くエヴァちゃんに付き合ってもらうからさ、そっちを優先したら？」

「まあ、あつちはちよこちよこ話をしたり成果の確認だけだからな。その方が楽と言えば楽だな」

ただ、桜咲の注文が酷いんだよね・・・

某魔砲少女の攻撃みたいな威力の斬撃に広範囲攻撃とか、複数の斬撃を一度に出す攻撃とかエトセトラ。

とにかく無茶なことを言うので最初は苦労したが現在ではええと・

・神鳴流の『百花繚乱』と『燕返し（キシユア・ゼルレッチ）』の二つの技の特訓を重点的に行なっている。

・・・・いや『キシユア・ゼルレッチ』は特に再現に苦労したな。

「・・・まさか、佐々木小次郎が使っていたとされる技が現代で見られるとは思わなかったわ」

「私もだよ・・・」

本当にどうしてこうなったのだろう、誰か教えてくれ。

「ああ、そうそう。ガトウさんの事で聞きたいことがあったんだっ
た……」

「ほへ？」

何時までも座っているのはなんなので、ぶらぶらとクレープを食べ
ながら歩いていた千雨は唐突に明日菜から話を切りだされた。

「なんかしばらく連絡が取れそうにないけど、心配しないでくれっ
て言われたんだけど……千雨ちゃん何か知ってる？」

「……ああ、それか。実はな——」

明日菜にMM元老院の不正を暴くためにガトウさんがネギと別行動
で魔法世界に行っているという話を話す。

ガトウさんは昔の仲間や地下支援組織、政府内の少数派閥を駆使し
て情報を集め行動し、ネギはいずれ来るであろう戦いに備えて反政
府組織に協力を求めに行っているのを聞いた明日菜は不安そうな顔
を浮かべた。

「二人とも本当に大丈夫なのかな……」

「安心しろよ、ガトウさんは今でも現役バリバリだしネギは自分の正体を隠しつつ行動しているらしいからな」

「でも、正体を隠すってことは迂闊に自分の使える体術とか魔法とか使えないってことでしょ、そこはどうするのよ？」

「パクティオーカードがあるじゃないか」

「ああ、そうね!!.....って、ネギってもう誰かと仮契約したの!？」

「あ、やべっ.....」

うっかり口滑らせちゃった!!

どうしよう、以前のバカレッドと違って今のコイツは頭の回転が段違いだ。下手な言い訳じゃ看破されちゃう!!

.....よし、ここは—————

「逃げろ—————!!!!」

「ちょ、千雨ちゃん!？」

魔術回路を起動し全身を強化すると全力疾走で広場の道を駆け抜ける。.....今の千雨に残された仮契約の真実の隠蔽方法はそれしかなかった。

「待たんかああああああい！！！！どうして逃げるのよお
おとおとおとおお！！？」

「誰が待つかあああああああああああああああああああ
あああ！！！！！」

ブラコン化した明日菜が咸卦法フルパワーで追跡してくる。
ええい、こうなったら妄想具現化で――――

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

逃げようと思っていたそんな時期もありました。

・・・ええ、逃げようとしたら居合い拳を真横にぶち込まれたんで
すよ、それはもうスレスレに。くそっ、妄想する時間さえ与えてく
れないのか！！チートっ子め！！

時間を稼ぐためにとりあえず林の中と私は隠れる。

「――――で、どう弁解する気なの千雨ちゃん？」

「・・・・・・・・・・」

気付いたら手錠で椅子に拘束されていました。ついでに私の目の前には明日菜の手に握られた二枚の・・ネギとガトウがそれぞれ描かれたカードがあった。

ちくしょー、もう話すほかないのかよっ！？

「・・・・・・・・わかったよ。正直に話すからさ、その・・手に握っているバールのようなものを下げてもらいませんか？」

ブラコン化した明日菜さんはネギ君のことになると、一歩間違えればご覧の通り病みます。
殺っちゃうことはないが咸卦法クラッシュで背後の壁が破壊されま
すのでご注意を。

「嫌だ」

「何で!？」

まさかの即答ですか!？

「だって・・・ネギとキスしたんでしょ？」

してねえよ!!ファーストキスをそう易々渡せるかよ、バーカ!!
何勘違いしてやがるコイツ!？

「よく考えてみる・・・ガトウさんとも仮契約してるんだぞ。いくら何でも二人の男にキスするなんてことは私はしないよ、あと片方の一人だけにするっていうのもな」

「え、でも・・・キス以外で仮契約なんて出来るの？」

「血があるだろう。……まあ、今じゃ主流じゃないらしいから知らないのも無理はない、痛みも伴うしな」

キスの方が主流なのは手っ取り早く済ませられるし、血を流す必要もない。それに大体は契約後に結婚することが多いからである。対して血を使うのはいちいち自身に傷を負わせないといけないし、痛いし面倒だから不人気なのだ。

「けど、どうして……」

「姉弟子としてのプレゼントみたいなものだよ……あと、ガトウさんにも一応何かしらアーティファクトが合った方がいいな
って思ってる」

出てきたアーティファクトが似たようなものだったことには驚いたが、すぐに原因はわかった。忘れもしない冬の日の遺跡での出来事が関わっていたのだ。

その事に気付いた私は再度遺跡の中を探索した時に見つけたのだ、
『地球の記憶』を……

「……さてと、質問された事には答えたからな。帰らせて
もらうよ」

「待って!! まだ訊きたいことが……それに手錠が……」

「そんなモノ、もうとっくに解かせてもらったけど?」

千雨の手には無理矢理外されたと思われる手錠があった。
しかも、何時の間にか彼女の肩には白い恐竜型のガジェットが乗っかっていた。

「え!？」

「ほんじゃ、バイニ〜♪」

明日菜が驚いている隙に開いていた窓から飛び出す。

幸運なことに自分がいた部屋は一階の空き部屋だったようだ。なので、着地後すぐに全力疾走して同志がいる安全な麻帆良工科大学へと駆けこんだ。

のだが……………

「旅行中って…………そりゃないでしょう」

研究室の前で一人「OTZ」し、目の前の現実絶望していた。
…………そう、倉橋來未は現在何故かアマゾンに出かけていたのだ。

「てか、アマゾンにわざわざ何で行くんだよ……わけがわからないよ」

ヨロヨロと立ち上がりながら愚痴る。

仕方がないので適当に明日菜に見つからないようにぶらつこう思った千雨は階段へ向かう。すると偶然上って来ていたある男と出くわした。

「おや、君は……蒼崎君？」

「貴方は……明石の親父さん？」

クールビズ姿の眼鏡をかけた私のクラスメイト『明石裕奈』の父親、明石教授が何の運命の悪戯かそこにいたのだ。

——この偶然の出会いを期に、私はどういう事か予定を繰り上げて彼にある真実を告げることにしてしまった。

s i d e o u t

ガトウ s i d e

「やれやれ……お偉いさんもよく50人以上も配置させるなあ」

「いやゝまったくホントねえ」

スタッグフォンによる内部簡易偵察と外部偵察を終えた俺はデータにまとめると、連絡を取りあっていた魔法世界での行動を支援してくれる魔術協会の地下組織《ターミナル》のメンバー、『明智裕』と合流を果たし明日の潜入調査の打ち合わせを行っていた。

「まあ、それは何とかするとして・・・・・・・・一番厄介なのはクルトが言ってた実験体の数だな」

「確か試験体でしたっけ？まさかとは思いますが、量産化に成功していたとしたら・・・・・・・・ヤバくないですか？」

「もしそうだったら本当にヤバイな。量産型ではなくタイプの違う奴もいるかもしれないし・・・・・・・・結局、臨機応変か」

ネギの奴にも警告したがこっちでも同じようなことになりそうだ。苦勞が絶えないな、全くもって・・・・・・・・

「武装の準備は大丈夫か？並みの戦いには確実にならないだろうから嚴重に行なっておけよ」

「わかってますって。だから、私のコイツ（・・・・）があるんじゃないんですか」

明智は黒い革のロング手袋に包まれた左腕を指さす。
手袋をわざと外すと彼女の左腕は次の瞬間・・・・・・・・急速な変形と回転をし、一つの武器へと成り果てた。

————人はそれを『ガトリング砲』と呼ぶ。

「……………毎度思うが、明智。お前は何処のコ○ラだ？」

冷静なツツコミがガトウの口から漏れ出す。

「仕方ないじゃないですか、左腕を犠牲にしてまであの時は逃げていたんですから……………」

「いや、だからと言って貫通式の魔法の射手ガトリング砲に魔改造サギタ・マギカすることあねえだろう。ましてはお前は女なんだから、元の腕みたいな義手を付けるとか考えろよ」

「自分……………エージェントですから」

「……………『元』な。今も大して変わりねえけどさ」

明智裕は元々、ある組織に属していた魔法使いだ。

そのある組織の命令で政府に派遣という名の潜入任務を行っていたのだが、偶然にも政府内の陰謀に気付いてしまい命を狙われる破目になってしまったのだ。

そして追手が迫る中、彼女は必死に抵抗し彼女を張っていた《ターミナル》のメンバーの支援を受け左腕を失いいつも何とか助かったのである。

———そう、彼女の本当の名前は『明石夕子』。

奇妙な運命に導かれて生きながらえた麻帆良学園のエージェント、
明石裕奈の実の母親であった。

s i d e o u t

千雨 s i d e

明石教授の研究室に招かれた（招かせたと言ってもいいかもしれ
ない）私は出された麦茶を一杯口に含んだ後、早々に真実を告げる話
を始め彼を混沌の渦へと巻き込んだ。

「――――以上が、私が知り得る真実です」

「そんな………夕……子が、生きて……いた……？」

下手に長引かせ誰かに邪魔されぬよう、淡々と千雨は明石夕子が偽名を名乗り生き残っていることを告げた。

「で、でも………大量の血と、左腕が見つかって……」

「死亡ということになったのは聞いています、それに葬式は幻術と人形を利用して行われたということも。ですが、彼女は『生きていたんです』」

証拠に《ターミナル》の女性メンバーと一緒に撮影した写真を提示する。

そこにはその時仕事で居合わせていた私自身も写っていた。

「学園長から少しは聞いていると思いますが私は仕事で魔法世界へ何回か行ったことがあります、その仕事の中で二、三度ですが夕子さんと会って会話しています」

「……夕子は何て言っていたんだい？」

「明石教授は私抜きでちゃんとやっているかとか、娘は元気に成長

しているかとかよく聞かれましたね」

「そうか・・・・・・・・・・」

男の涙を見せたくないということで後ろを向く明石教授。

・・・・・・・・無理もない、死んだと思っていた最愛の妻が生き延びていたことを突然告げられたのだから。

「本当に・・・・何時言い出そうかと迷っていたんです。予定ではもう少し先になるかと思っていたんですが、今日言わないといけないような気がして・・・・・・・・・・」

きつと良心の呵責という奴だろう、私に言わせるように仕向けたのは。

「・・・・・・・・この事は他の人に話したのかい？」

「ドネットさんには既に話しています。・・・・・・・・本当はドネットさんの口から話してもらい、私がそこに同席する形になる予定だったんですよ」

「でも、彼女忙しいからな・・・・予定の都合とかあるもんね」

ゲートポートでの仕事が結構忙しいと聞いていたので何時になるかわからないという点も踏まえて今日は話をさせてもらうことにし

たが、それによくよく考えれば予定前に万が一の事態になったら話せるに話せなくなってしまう可能性もあった。なので今回話せたことはある意味良かったのかもしれない。

ところで左腕はどうしているんだい夕子は・・・とその後聞かれたが、まさか超魔改造されているなんて口が裂けても言えなかった。・・・だって、ねえ？

side out

エヴァ side

―――何だろうか、この・・・奇妙な感覚は・・・

別荘内でバカンスを楽しんでいた私は、ふと冷たい風の中に紛れ込

んだ謎の感覚に思わず空を見上げ顔をしかめた。

「・・・・・・・・・・どうかされましたか、マスター」

「いや・・・・・・・・ちょっとな」

茶々丸が心配しているような目で見つめ問いかけるがそれを制し、
何もない何処までも続く大海へと視線を移す。

「（確か・・・・・・・・千雨の話では、ぼーやはタカミチの師匠と今は魔法
世界にいるのだったな）」

何でもMM元老院の不正を暴くために動いているだとか聞いたが、
そう簡単にいくものだろうか？

相手は俗物共の塊であっても魔法世界を支配する大組織だ、二人だ
けで立ち向かうのは無謀すぎる気がするな。

「大丈夫だよ、エヴァンジェリン・・・・・・・・二人を支援する組織ぐらい
ちゃんと用意してあるさ」

「・・・・・・・・千雨、さり気なく思考を読んできてるな」

汗だくで着崩れた服装姿で勝手に千雨が加わってきた。

・・・・・・・・何故だろう、凄いやつれて見えるんだが気のせいかな？

「明日菜という死神とチェイスしてただけさ・・・エクスカリバーを持っただけ・・・」

「普通のバーブではないのか！？　というか、よく警察に通報されなかったな、おい！！」

「警察の存在など無意味・・・それが麻帆良クオリティだからな」

認識阻害は程々にするべきじゃないのかジジイ、マジで生徒が犯罪行為しているぞ。

特にお前達が大事にしている亡国のお姫様とやらが鈍器を振り回しているのだから、警察沙汰にされなくなったら全力で止めてやれ。

「それよりもさっき言った支援組織だけど、彼らが本気出せばすぐにでもMM元老院の連中終わるぞ？」

「本気出せばって・・・それほどの力を持っているのか！？」

「まあな。でも、事後のことを考えたら今は地道に行動するしかないわけよ」

「ああ、なるほど。後始末抜きにしたらの話か・・・」

それでも十分凄いなと思うのだが、ここでその組織の事を長々と話すわけにはいかないな。せっかくのバカンスが台無しになってしま

う。

そう思った私は話を切り上げて、千雨もついでにバカンスを楽しめと言おうとしたのだが頭をポリポリと搔いている千雨自身に遮られてしまった。

「……ただ、地道に調べたら調べたで何か妙な展開になりそうなんだよな」

「何か問題でもあったのか？」

「いや、『今』は起こっていないんだけど『これから』起こりそうな感覚がしてな」

「そうか……（千雨も感じていたのか）」

今はまだ思い当たる節など微塵にもない。だが、何となくだか私は・
・私達はその妙な展開とやらの問題に巻き込まれそうな気がして
ならなかった。

――まさか、本当に巻き込まれることになるなんてこの時は思ってもいなかったがな。

side
out

流離う骸骨編二承（後書き）

次回予告

「・・・MMN計画？何だこれは」

「実験体の計画だけ行われていたんじゃないの!？」

潜入を開始した二人は恐るべき計画の裏側を知ることになる。

「私が行くわ!!」

「貴様はっ・・・・・・・・!!」

「やれやれ、バカは一度痛い目に遭わないとわからないのか？」

一人残り敵と戦うことにしたガトウ。彼は帽子を押さえ彼らの前で
こう呟く・・・・・・・・

「————そっちに撃つ覚悟ができているなら・・・こっちも全力で行かせてもらうぜ」

歴戦の戦士は、死に逆らって運命に挑む。

その先にあるのは果たして・・・

次回、流離う骸骨編一転

お楽しみに!!

Mの改造／強化された人達（現時点での魔改造設定）（前書き）

今週の29日からテストの為に更新が1週間ほどできません。
なので、その代わりと言ってはなんですが設定その2をどうぞ。

Mの改造／強化された人達（現時点での魔改造設定）

魔改造者リスト

ネギ・スプリングフィールド

15歳の少年で英雄ナギと女王アリカの実の息子。主人公。

原作より思考力が優れ、自分が置かれている状況をはっきりと理解しているため、原作のようにあまりトラブルは起こさない。だが、少しファザコンでマザコン。（離れ離れなんだから仕方ない）

キレると一人称が「俺」に変わり、橙子の指示の下身に付けた体術・剣術を得意とする。千雨との仮契約で仮面ライダーアクセルに変身。現在魔法世界で反政府組織と関係を持ちアリアドネーを目指す。

蒼崎千雨

元・長谷川千雨だった少女。主人公その2でネギの姉弟子。

異常特化型直死の魔眼と妄想具現化、さらに精霊具現化・使役の能力を持つ。また、将来アラヤでもガイアでもない第三の抑止力的存在になる予定らしい。抑止の精霊「レイン・マクスウェル」を内包している。

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ

原作で死亡した紅き翼のメンバー。主人公その3。
宝石爺に助けられ不老の体になってしまったが、その強さは未だ健在。

千雨と行動を共にしていたことがあり仲がいい。また、ナギの息子であるネギに目をかけており頼れる相棒としている。千雨との仮契約で仮面ライダースカルに変身予定で現在魔法世界で打倒MM元老院の為の証拠集め中。

神楽坂明日菜

千雨により記憶が復活したオスティアのお姫様。
現状で行方がはっきりしている血縁者（家族）であるネギを弟のように思っている。（つまりブラコン）
咸卦法を得意とし、時々千雨と共に修行している。病むと怖い・・・

桜咲刹那

このちゃんこと近衛木乃香の幼馴染で護衛剣士。
かつて忌子として迫害されていたが、詠春により引き取られた。木乃香がおぼれた時に無力さを感じたため、あまり自分から木乃香に関わろうとしない。

影響ゲムにより髪が「ネギま!？」verになりオシャレに目覚め、千雨と共に現在新必殺技開発に着手。

龍宮真名

半魔人巫女スナイパー。刹那の相棒。

金さえ弾めば大概の仕事は引き受けてくれる・・・はず。

影響ゲムで巫女服時に緋弾のアリアの白雪の姿に変わるなどした。最近じゃ剣術に手を出したとか・・・

タカミチ・T・高畑

2-A担任の魔法先生。千雨の協力者でエヴァ救出戦においてはスッパ―として活躍した。

ガトウが生きていたことに驚くものの、そこから自分で考えて行動するということを深く考えるようになった。

ネギに関してはナギを重ね合せるのではなく、一人の意思を持った人間として接することにした。

明石夕子

2-Aのクラスメイト明石裕奈の母親。

原作では10年前に任務中において殉職したとされたが、魔術協会の地下組織《ターミナル》の支援によって左腕を代償に九死に一生を得た。（その後彼女も参加）

左腕の義手は貫通式の魔法の射手を撃ち出すことができるガトリングアームになっている。（龍が如くOTEの郷田龍司の腕よりシャープ）

他の登場キャラについては以降、魔改造予定。

Mの改造／強化された人達（現時点での魔改造設定）（後書き）

魔法世界編（原作）がこの作品では凄く大変なことになります。

しかも、ネギが魔法世界で〇〇しちゃう予定です。

果たして何なのかは・・・読んでのお楽しみに！！

流離う骸骨編一転（前書き）

時間を空けすぎてごめんなさい。

テストも終わりバイト三昧で書けませんでした。

少し短いですが次回でかなり書きまくりますので勘弁してください。
では、どうぞ！！

流離う骸骨編一転

———そこは異様な空気に包まれていた。

ジジジッ・・・と、怪しい音をたてる一部の電灯の下で一組の同じ白衣を着た男女がこそそと周りを気にするように話合っていたのだ。

「・・・なあ、本当にみんな終わるんだよな？」

不安そうな声で男の方は呟く。対する女はきつい目つきで睨みつけながら男のネクタイを引っ張り言った。

「・・・当ったり前でしょ！！苦勞してわざわざ此処の情報を彼らにリークしたんだから！！」

「で、でもよ・・・あの人が来てくれるって本当なのかよ？」

男が言うあの人は公式では死亡とされている英雄が一人、ガトウの事だ。女から生存していると聞かされた男は公式発表とは違う事実に驚きつつ、この研究所へと来てくれるのかと不安に感じていた。

「大丈夫よ、ゲーデル提督から直々に依頼されたらしい・・・」

「ゲーデル提督って確か・・・元紅き翼のメンバーでここ数年の間

で実力を伸ばしてきたっていう・・・」

「そうよ。それに彼は別件であのオスティア崩壊の真実を追っているの」

オスティア崩壊時、彼が密かにリークした情報や現地の人の証言ではアリカ女王は必死に国民を逃がそうとしていたらしい。しかし、その後あらぬ疑いをかけられ・・・恐らくはMM元老院が彼女をスケープゴートの役割として拘束したのだろう。結果、公式ではアリカ女王は処刑により死亡したと記されている。

「あの崩壊現象はもっと艦隊が展開を早くしていれば起こらずに済んだかもしれないんだっただな・・・」

「ええ、一部の提督は俗物たちの息がかかっていなかったから独断専行していたけれどね」

そこで一旦、二人は話を切り上げると目の前にモニターを展開し「研究所が魔法生物を研究し開発した実験体」ではなく【既に7人も失敗作として破棄された計画の8人目】の姿を映す。それは明らかに人間でネギがこの後倒すことになる悪魔を素体にした実験体とはまるで違っており、青白く光る水槽の中で眠るようにして生かされていた。

「問題はこの【MMN-08】なんだよな・・・」

「まだ試験も行っていないけど、過去の7人より遥かに肉体が強化されているみたいよ」

つまり、今回の8人目の実験素体は完全な強化人間。それも失敗作として破棄されてしまった者達から得られたデータがふんだんに使われているのだ。

「……………くそ、もっと早く行動していれば!!」

壁を静かに叩きつけ、見捨てることしかできなかった【MMN計画の実験素体】のことを男は悔やむ。

「私達が早く行動しすぎてもダメだったはずよ、組織のメンバーだ
ってその時はまだ実力者ほとんどいなかったらしいもの……………」

それでも何かが出来たはずではなかったのかと過去を悔いる。
しかし、過去は変えられない。人はただ明日へ未来へ向かい続ける
ことしかできないのだ。……たとえば、自身の歩む道が過酷であっ
ても。

—————そんな中、モニターに映されていた【8人目】の両腕
は誰にも気づかれることなく薄っすらと怪しく光っていた。

ガトウ Side

FULL BURST

[illegible]

俺の真横で雄叫び……いや、何て言ったらいいんだろうか？ 明智（明石夕子）が義手に弾丸のようなカードリッジをこれでもかというほど装填したかと思えばガトリング砲の筈の腕からバスケットボールぐらいの球体が排出された。そして、貫けという彼女の願いがそこに具現化し訳あって地下を潜って進んでいた俺達に頭上にぽつかりと人が一人通り抜けられそうな小型マンホール状の穴が開いた。

「……よしっ!!」

「よしっ！！じゃねえよ……事前に地形を把握していなかったら本当に危なかったぞ」

もしかしたら、穴開けたらすぐに敵とエンカウントという事態になりかねないかもしれない。それだけは勘弁願いたかった。

「大丈夫ですって!! ささ、行きましようか」

「はいはい……………」

軽く溜息をつく、ガトウはスパイダーショックに擬似メモリであるスパイダーメモリを入れると穴の外の地上へと投げ固定させる。垂れ下がったワイヤーに飛ぶようにガトウは上に夕子は下に掴まるとゆっくりと地上へと降り立った。

「……………人の気配はないみたいだな」

「そりゃ、倉庫ですからね」

倉庫は滅多なことがない限りあまり人はいない。それも古い倉庫ならばなおさらだ。

念のために辺りを軽く調べた後、俺達は事前の偵察で見つけておいたダクトを開き、内部へと侵入することにした。

「しかし、やけに広いなこのダクトは」

「屈むだけでも何とか行けそうですね」

まあ、出来るだけ静かに移動したいから匍匐前進で行くけどな。

しばらく別れ道もないためまっすぐ進み続けていると、ふとガトウはあるモノに気付いた。

「……………何だこのメモは？」

見ればテープで血が薄っすらとついた紙がダクト内に一枚貼り付けられていた。特にトラップのような類がないのを確認し中身を確認

してみる。するとそこには書き殴られた字で『MMN計画はもはや人のする計画ではない・・・これを読んだものはどうかこの悪夢を終わらせてくれ』と記されていた。

「・・・『MMN計画』？」

クルトから聞いた覚えのない謎の計画の名前を見てガトウは眉をひそめ、同時に何かこの計画名に引っ掛かるものを感じた。

「この計画・・・調べようによっては例の実験体の方のより強力な証拠になるかもしれませんね」

「ああ・・・そうだな」

今回の潜入で可能ならば調べられればいいなと思いつつ、更に二人は奥へと進む。

「・・・ここでやっと別れ道か」

進み続けて10分ほど経った頃、ようやく二人は目的の部屋へと続くダクトの入口の近くへと来ていた。

「右が管理室で左が警備室近くの第三倉庫でしたね」

「二つの部屋はそれほど離れてはいないな・・・・・・・・」

精々400mぐらいの距離か。研究員やMM元老院の私兵の連中を上手く誘導させることができればデータの入手も容易くなるだろうな・・・・・・・・よし。

「俺が囧になる・・・その間に実験体のデータとMMN計画の事をよろしく頼む」

「了解です、お氣をつけて・・・・・・・・」

出来るだけ早く夕子が行動しやすいように慎重かつ素早い動きで第三倉庫を目指すことにしたガトウ。

彼は懷にしまっているパクティオカードの感触を確かめながら猛然と突き進んだ。

side out

夕子side

「さてと・・・・・・・・・・」

夕子は着ているライダースーツのステルスモードを起動すると協力者（内通者）が待つ休憩室へと向かった。

上から眺めると、当の本人たちはコーヒーを飲みながらチラチラと腕時計を眺めていたりしている。それを確認した夕子は消音してから静かに侵入口を開け、二人しかいないはずの部屋のテーブルに置かれたまま飲まれていないコーヒーが入ったカップを手を取った。

「・・・・・・・・!! 来たのね?」

「ええ。待たせちゃったかしら?」

「そうでもないわ。・・・で、あの人は来てくれたの?」

「もちろんよ。ま、今は私が調べる時間を稼ぐために囿になって貰っているけれどね」

「そうか・・・・・・・・・・」

男の方はホッと安堵し飲みかけのアイスコーヒーを飲み干すと、白衣の内ポケットから黒いUSB端末を取り出しテーブルの上をスライドさせて渡した。

「実験体に関する情報はありったけ詰めたつもりだ。・・・だが問題はもう一つの計画だ」

「『MMN計画』って奴ね？事前に知らされていないからよくわからないんだけど、どういう計画なの？」

「実はだな———『コンディショニングエラー発令！！、コンディショニングエラー発令！！第三倉庫にて侵入者一名を確認！！至急対処されたし！！・・・繰り返し———』っと、それどころじゃなくなっちゃったみたいだな」

計画の内容について話そうとした男の声を遮るように警報が鳴り響く。

正直、今聞けなかったのは残念だったけれどどうせ管理室を制圧したら好きに調べられるんだから良しとしますかね？

二人を引き連れて私は管制室への入口へと駆けた。

s i d e o u t

ガトウ side

—————ダダダダダダダダダダダッ!!!!!!

雪崩の如く第三倉庫へと研究所の私兵（魔法使い）達は流れ込んでいく。

そんな光景をちらりと見た後、ガトウは帽子を深くかぶり自身を囲む外道たちへ言い放った。

「……………まったく、侵入者一人にこれだけに人数を投入するとはな。よっぽどお前達は世間に知られたくない事をしているんだな？」

苦笑をリーダーと思われる女へ向けてそう言葉をこぼす。

「貴様……………一体何者だ!?!」

女の声と共にガトウに無数の魔法の矢が迫る。しかし、歴戦の戦士たるガトウは帽子を吹き飛ばしながらも難なく上の足場へと着地しその顔を晒した。

「……………なっ、お前は……………お前は死んだはずの!?!」

「まさか!?!」

「そんな馬鹿な!?!」

そこにいた誰もがその素顔を目にし固まった。なぜなら、そこにいたのは自分達が既に公式発表として死亡としたはずの男、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグが大戦時と何ら変わらない姿で平然と吹き飛ばされた帽子を再びかぶり立っていたのだから。

彼は懷から大事に持っていた一枚のカード、千雨とのパクティオーカードを取り出しアデアットする。現れたのはL字のスロット口を持つベルトと骸をイメージさせるアルファベットのSの文字が刻まれたUSB状のメモリ。彼は腰にベルトを巻きつけメモリを握りしめるとこう言った。

「————そっちに撃つ覚悟ができているならな・・・こつちも全力で行かせてもらおうぜ」

『SKULL』

「・・・変身」

『SKULL』

紫色の光る風が静かに彼の身体を包み込み、黒いボディと白いマフラーが出現する。また顔は骸骨としか言えないモノへと変化し「S」の文字を示すように傷が走った。

「――――さあ、お前達の罪を・・・・・・・・数えろ」

右手をピストルのように形作ると、先程まで自分を取り囲んでいた者達を指してそう彼は言った。

s i d e o u t

??? ?
s i d e

――場所は移って、研究所地下ブロック『MMN計画』素体保管室。

ガトウが自ら囿になり夕子たちにデータの入手を任せていた頃、そ

コポコポと音をたてていた水槽が破裂して、ガラス片を辺りに撒き散らしけたたましい雑音を響かせる。・・・・・・そしてそれが、彼女の最初の戦いを告げるゴングだった。

s
i
d
e

o
u
t

流離う骸骨編一転（後書き）

次回、流離う骸骨編一結

ネギを怒らせた原因である『MMN計画』、その全貌が明らかになるとき、新たな宿命が少年と男を更なる戦いへと誘う。

そしてガトウが会おう少女の正体とは果たして!?

次回の更新をお楽しみください。

流離う骸骨編一結（前書き）

ガトウ編ラスト!!

本当はもっと長い話にしたかった!! けど、次の章の為に犠牲になったのだ・・・

次回はまたまた予告編です。挿絵もあるよ♪

流離う骸骨編一結

夕子 side

ガトウさんが囹になって研究所のお馬鹿さん達を引きつけている間に私達三人は多少残って居た研究員を強制的に眠らせ（気絶させたという方が正しいけど）、地道にデータの入手を試みていた。途中で何度かパスワード入力画面が出てきたりしたがそんなモノは気合で・・・というのは無理だったので、ぶっ倒れている研究員に記憶を読んだりして何とか乗り切ったりした。そして今、最後のプロテクトが外されようとしている。

「・・・・・・・・・・で？さっき言おうとした『MMN計画』の内容って一体何なの？」

後はエンターキーを押すのみとなった直前で私は男に問いをぶつけた。すると、彼は席を替わるように私に告げると座りながら話し始めた。

「『MMN計画』はな、ナギ・スプリングフィールドの実の息子であるネギ・スプリングフィールドが知ったら恐らく怒り狂う狂気の計画なんだよ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ネギ君が？」

どういう事だろう、何故ここでネギ君とサウザンドマスターの名前

が出てくる？それにこの計画の内容を彼が知ればネギ君が怒り狂うとは一体？

夕子の疑問を余所にエンターキーを彼が押すとモニター上に計画に関する資料が展開された。なかでも夕子の目を引いたのは謎のDNAの二重螺旋構造の立体映像だった。

「これは・・・？」

「右がこの研究所で人工的に作られたDNA、左が・・・
・ナギ・スプリングフィールドのDNAだ」

「！？・・・ちょ、ちょっと待って！！それじゃあ、この研究所で開発していたのって・・・」

「『MMN計画』————正式名称、『マギステル・マギであるナギ・スプリングフィールドの遺伝子を利用した人工マギステル・マギ開発計画』は文字通り、ナギのいわばクローン生産計画の実験素体だ」

混乱しそうな頭を落ち着かせ、ここまでの状況を整理するとMM元老院は二つの計画を考えたことになる。

第一に、魔法生物等を利用した生物兵器の生産計画。これの最終目的はネギ君が対処予定の実験体が目指すであろう進路上からアリアドネーであることがわかる。多分、MM元老院は大戦時・・・いや、現在においてなお中立の学術都市国家であるアリアドネーの地位を維持できる力を手に入れようとしているのだろう。その先にはヘラス帝国への侵略さえある可能性もなくはない。

第二に、人工サウザンドマスター生産計画。これは自身の私兵を増

やすだけではなく、ネギ君が6年前に石化または死亡もしくは思い通りに動かなかった場合の保険だろう。事前に自分達の思い通りに動く英雄の息子そっくりな実験素体がいたりしたら、言うことを聞かないネギ君など用済みになる。絶対にすり替えだって考えているに違いない。

「・・・そりゃあ、ネギ君は絶対キレるわね」

一度会ったことがあるけど、あの子優しいそうな顔して怒ると怖そうな雰囲気だしていたもの。

「しかも既に7人もの実験素体が生み出され破棄されている。言い換えれば、妹を7人も失ったことになるな」

「な、7人・・・」

いくらなんでも生み出し過ぎでしょうが!!もっと早い段階で諦めればこんな犠牲は出なかったのに・・・。

というか、そもそも人様の遺伝子を勝手に使って命を弄ぶんじゃない!! 一体何考えているの計画の立案者及び参加者!?

「そして現在【MMN-08】・・・つまり、【8人目】の実験素体が開発され試験を明日に控えている」

「明日う!? どんだけせっかちなのよ、まったく!!」

まさかこの後に9人目だの10人目だの生み出す気なんじゃ・・・?
ああ、想像しただけでも腹が立つ!! 責任者出てこい!! この魔改造ガトリングアームでハチの巣にしてあげるわ!!

無性に腹が立っている私に代わり問題の8人目とやらのデータや映像を彼らが閲覧可能にしてくれるとイライラしながらも私はその内容を確認していく。・・・ええと何々、『01〜07までで得られたデータを踏まえ、細胞劣化の排除を目的とした改造型遺伝子AF―D6を投与――』って、何お肌とかガン細胞とか生きていくうえで必ず悩む問題の解決しちゃってるのよ！！此処の研究者の方がよっぽど化け物じゃないの！！

「【MMN―08】は地下ブロックに特別エリアにて生体ポッドに入れられている。できれば保護してやってほし・・・・・・・・・・あれ？」

「どうしたのよ、アンタ？」

「何か問題でもあったの？」

保護してほしいという言葉は途中でも理解できたけれど、どうしたの？何かヤバいことが起きていそうで怖いんですけど。

「・・・・・・・・・・ポッドが割られてる」

「・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・はい？」

予感的中。できれば外れて欲しかった！！

男が観ていた監視カメラの映像を急いで確認するとそこには・・・無残にも引きちぎられた首や腕、足がポッド前で散乱していた。

「・・・うわぁ、凄いスプラッタ」

「そういう問題じゃないでしょう!？」【MMN-08】は今どこにいるのよ!？」

「今探してるって!!」

モニターの映像が一気に警備室か監視室みたいな感じになった。・

・別に必要な情報は既に入手しているから気にしないわ。

自分も捜索に加わり手当たり次第にカメラを調べていくと医務室近くに子供のような人影を発見した。拡大してよく見みると病人服を着ているようだ。でも・・・・・・

「ねえ、資料で見たのと容姿がちよっと違うんだけど?」

「具体的にどこですか?」

わかりやすいように映像の子と資料の子を画面に並べ比較したものを表示する。資料ではナギ・スプリングフィールドやネギ君に見られるような赤毛が特徴とされているが、映像の子は見るからに赤毛ではなく・・・何というか・・・

「ほら、血みたいな黒っぽい赤色をしているでしょう?」

「・・・本当だ」

「でも、数時間前に見た時は確かに赤毛だったわよ?」

ならば原因は何か?

生体ポッドを稼働させようとした痕跡が見られるからに、多分いき
なりの実戦投入でも試みようとしたんでしょうけど・・・それにし
たって不自然過ぎるわね。

何はともあれ行って確認ほししなければいけないので、脱出ルートの確
保を二人に任せガトウさんに一先ずは連絡を入れることにした。

s i d e o u t

ガトウ s i d e

と見る見るうちに女の身体は変貌を遂げていったではないか。背中からは蝶を彷彿とさせるような羽根が生え、鳶のような触手が全身を覆い尽くし人肌を銀色へと染め上げていった。

「・・・こいつぁ」

「人間を超人化させることが可能な【MT細胞】マキシマム・トランス・・・それを投与した者は各々に相応しい戦う姿へと変えてくれるのだ!!」

蝶女は大きく開いた羽根をバサバサと高速に動かすとソニックムーブを発生させ、倒れている仲間すら巻き込み俺に攻撃を繰り出した。咄嗟の判断で右方向へ飛び回避しコンクリートでできた柱の陰へと隠れるとすぐさまスカルマグナムで応戦する。

だが、蝶のように舞い蜂のように刺すという言葉の通り素早い動きで弾丸はかわされてしまった。

「ちっ・・・（開発中のルナメモリがあればどうにかできそうなんだがな・・・）」

アーティファクトのメモリとは違い、人の手で造られたガイアメモリは現在麻帆良学園で千雨と來未が開発中だ。唯一稼働試験が済んでいるのは明日菜の護衛目的で造られたフアングメモリぐらいで扱えるには結構癖があるらしい。

仕方がないので本来の戦闘スタイルである咸卦法を展開し手当たり次第に無音拳を撃ちこみ動きを封じ込めることにした。

「はあああああああああああああああ!!!!!!」

「くっ!! 噂の究極技法か・・・!!」

見事に動きを制限しマグナムを隙について撃つガトウであったが、ここで蝶女は予想外の行動をとった。なんと、倉庫の外へと飛び出したのだ。

「逃げる気か!!」

慌てて追いかけるもただでさえ素早いのでなかなか追いつくことができない。虚空瞬動でも使えば一時的に距離を詰められるだろうが今の状態が無限ループするだけだろう。

そこでガトウは魔法世界に来るにあたって開発してもらった秘密兵器をスタッグフォンを取り出し呼び出した。

「ミラクルマシンのお出ました」

「・・・ハッ!! 流石の英雄も怖気づいたか」

やけに広く長い廊下をガトウを引き離した異形の蝶は鱗粉を巻きつつ移動していた。・・・ただし、余裕があるのか無駄な動きで舞い

ながらではあるが。

夕子達が作業を続ける管理室すら通り過ぎ彼女は地下ブロックへ向かう通路をゆっくり進もうとした。が、そこで彼女は思いもよらぬ方向から突如として攻撃を与えられることになった。

あまりにも急な出来事であったため壁へと叩きつけられるようにぶつかる。

「な、何だあ!？」

わけも分らず攻撃を受けた彼女は視線を攻撃があった方へと向ける。なんと、そこには撒いたと思っていたガトウが黒塗りのバイクに空中戦闘用ユニット【タービュラーユニット】をドッキングさせた「スカルタービュラー」に乗り強烈な光をライトで浴びせかけていた。

「トオッ!!」

怯んだ蝶女にガトウは飛び掛かりパンチを喰らわせる。その拳には手加減というものはまったくなく、ただ目の敵を倒すという思いが込められていた。

対する蝶女は地面を何度も転がりつつも立ち上がり空中へと躍り出る。そして羽根を光らせ粒子を中央に収束させるとエネルギー球として発射の構えをとった。

「……………そろそろメだな」

ロストドライバーからスカルメモリを引き抜くとベルト右に備え付けられたスロット口へメモリを勢いよく挿入する。

『SKULL! MAXIMUM DRIVE!!』

『骸骨の記憶』の力が極限まで引き出されていることを告げる電子音が鳴り響き、胸部から紫炎の如きオーラを放つ骸骨が現れる。そして蝶女と同じく飛び上がると必殺の蹴りをかました。

「……………スカルライダーシュート」

蹴りと共に放たれた骸骨は相殺することもなくエネルギー球を突き貫き、正確に蝶女へと襲い掛かった。

「ああああアツアアアああああアアアアああああアーーーー
ーーーー！！！！？」

「……………命を冒流するから醜い最期を遂げるんだ」

断末魔めいた叫び声が聞こえたかと思うと激しい爆発が辺りを包み込んだ。その影響で地下ブロックの入口がコンクリート片によって封鎖される。

ガトウはメモリを引き抜き変身を解除するとその燃え盛る炎をじっと見つめた。

しばらくしてデータの処理を終えた夕子が小走りで彼の下へと近寄る。

「が、ガトウさん!!大丈夫ですか!？」

「ああ、色々手こずったが……何とかな」

特に怪我もなく済んだのは幸いだったと言えよう。

「・・・ああ！それよりも急いで伝えないといけないことが！！」

「何かあったのか？」

「実験体のデータのほかに【MM計画】のデータも手に入ったんですが、その内容が『ドオオオオオオオオオオオオン!!!!』」

「な、何っ!？」

夕子はまたしても話を中断されてしまった。しかもその話を遮ったのはガトウが封鎖してしまった地下ブロックの入口を吹き飛ばした音であり、ガトウや夕子が引き起こしたものではなかった。

「新手か!？」

もしや、何らかのトラブルで実験体か何かが外へ飛び出してきたのかと考へたガトウは咄嗟に構えをとつた。しかし、今だ燃えさかる炎と瓦礫の中から出てきたのは――――――全身を黒き炎で包み謎の紋章が体中に刻み込まれている血色の髪の少女だった。彼女は威圧するようにガトウと夕子に目を向ける。

「・・・おい、明石。あの子は一体？」

「ガトウさん。．．．あの子は【MMN-08】．．．この研究所で極秘開発されていたサウザンドマスターのクローン体なんです」

「何っ！？ナギのクローンだとお！？」

にしては髪の色が違ったりしているが．．．何処かナギの奴に似ている気がした。ついでに言えばネギにも若干。
そう思っていた矢先、少女の方に動きが見られた。．．．．．何か喋ろうとしているようだ。

「．．．．．は．．．．．の？」

「ん？」

「あな．．．は．．．タカ．．．ミ．．．の？」

タカ．．．ミ．．．？おいちょっと待て、そのキーワードから連想する人物って一人しかいないんだが．．．．．。そもそも何故俺を知っているような眼を急に向けるんだ？

「アス．．．さ．．．の．．．大切————（バタリ！！）」

またまた奇妙なことを口走ったかと思ったら事切れたかのように気を失って少女は地に倒れ伏した。急いで駆け寄りその体を抱え起す。

「まったく何だっていうんだよ………」

その後少女の衝撃の真実を知るまで俺はその純粋な疑問が脳裏から離れることはなかった。

side out

ネギside

———そして、場面は喫茶店へと戻る。

「お、おい何があつたんだネギ!？」

突然カウンターテーブルを叩きつけ歯軋りを始めたネギをエイゼは心配し声をかける。するとネギは携帯を乱暴に突き出しエイゼに問題の内容が書かれたファイルを見せカウンターに頭を抱え込み座った。

数分間沈黙が続き、エイゼがファイルを閲覧し終え携帯をネギの横に置くと・・・・・・彼もまた怒り狂う様子で店の奥へと消えていった。

[illegible]

血が出るのもお構いなしに彼の手のひらは紅く染まる。

「俺を・・・俺をどこまで馬鹿にすれば気が済むんだあああああああああああああ！！！！！」

母の努力を踏みにじり、父親の誇りを踏みにじったMM元老院に対する怒りはもう抑えきれないほどネギを奮い立たせていた。それでもあと一歩踏み出せば憎しみへと発展しかねないほどだ。

そんな彼の怒りに共感したエイゼはカウンターに戻ってきて、年代物の比較的次数の低いワインを二人分用意すると片方をネギに渡した。

「ネギ・・・いつまでも今の怒りを抱え込んでちゃいけねえ。だから、今夜はお前の気が済むまで飲んで語り合おうぜ」

「エイゼさん……でも」

「安心しろ、酒の飲める年齢なんて俺たち魔法使いには関係ねえ。心配ならよく効く酔い止めやるからよ」

こうして僕は抑えきれないこのどうしようもない怒りを男と男の話し合いによって発散することにした。その話し合いは午前2時まで続き今後の行動方針まで存分に語り合ったりした。

そして眠気が我慢できなくなった頃を見計らって泥のように僕は眠ることになった。

s i d e o u t

? ? ? ? s i d e

————— 一方その頃、麻帆良大学情報通信学部の倉橋來未の研究室では奇妙なことが起こっていた。

なんと部屋に鍵がかかって誰も入れないはずであるのにもかかわらず、そこには明らかに怪しいサングラスをかけた黒スーツの女性がいたのだ。

彼女は器用な手つきで本来二人しか開けることができない金庫のロックを外していく。重々しい金庫の扉がいつも簡単に開かれるとそこにはアタッシューケースが一つ入っていて、そのケースのダイヤルキーすらも彼女はものの数秒で開けてしまった。

「ふむ・・・やはり現段階ではこれだけしか開発されていないのか」

ケースの中身は千雨と來未が開発したガイアメモリ『サイクロン』『ジョーカー』『ヒート』『ルナ』・・・そして、今は入っていないが大きめのガイアメモリ『フアング』が納められていた。

「だが、それでいい・・・。イレギュラーが発生していないという証拠だからな」

何故かエメラルド色のガイアメモリ『サイクロン』のみをその手に取ると、ケースを元あった場所へと戻し彼女が来る前と同じように部屋を整頓していく。

「さてと、ここから退散するとするか」

部屋に入った時と同じようにして彼女は指を鳴らすと背後に謎のオーロラが生み出され彼女を飲み込み部屋から消失させた。

奪われたガイアメモリ『サイクロン』、その行方は侵入者である彼

女しか知り得ない。

s
i
d
e

o
u
t

反撃の刻印編へと続く

流離う骸骨編一結（後書き）

次章、反撃の刻印編。

何かがおかしい少女の正体。

さらなるMM元老院の陰謀。

消えたサイクロンメモリの行方。

謎の女性の暗躍。

大罪を犯した男の恐るべき事実。

決戦の地は、アリアドネー。彼らの本当の物語はここから始まる。

外伝予告－反撃の刻印編－（前書き）

短いけど・・・予告編です。

次回からサブタイトルがつく予定。

章の名称はあくまで章の名称に。

外伝予告－反撃の刻印編－

ハイペリアの危機を見事回避し、ひとときの平穏を取り戻すことに成功したネギ。そんな彼に伝えられたガトウからの報告は想像を絶するほどの内容だった。

「父さんのクローン・・・・・・・・」

どうしようもない怒りに迷いながらもネギは問題の少女と会うためにガトウと合流予定のアリアドネー学術都市を目指す。

だが、そこで待ち受けていたのは忘れもしないあの悲劇の真実を知る者と只者ではなかった少女であった。

「・・・お前が、ネギ・スプリングフィールドか」

「貴方は何を知っているんですか!？」

「名前のお礼に本当の私を見せてあげる・・・・・・・・」

「・・・・・・・・なっ、これは!！」

そこで衝撃の真実を知った少年は新たな決意を心に刻みつける。

「MM元老院は………僕が潰す!!」

そして暗躍するガイアメモリ……「サイクロン」を盗んだ黒服の女。彼女はネギを遠くから見つめ、こう呟いた。

「………君が死んだら困るんだよ、私達が」

果たして彼女は敵なのか味方なのか。また、何のためにガイアメモリを盗んだのだろうか？

「……まさかな」

千雨は動き出した運命をその身に静かに感じ取り、女の正体へと迫る。

同時に新たなる敵も欲望の果てに動き出そうとしていた。

「・・・ふはははは！！これで私は、我らは世界の王者となるのだあ！！！！」

だが、それを彼らは・・・ネギとガトウ達は決して許さない。だから、戦い続ける・・・命ある限り、守り続けるために・・・！！

「・・・誓ったんだ」

「もう二度とあの嬢ちゃんを・・・」

「大切な人たちを・・・」

「悲しませたくないって（な）！！」

千の雨を越えて・・・アナザーエピソード 外伝―仮面ライダー×仮面ライダー スカル
&アクセル アリアドネー戦記2002FINAL 反撃の刻印編

>i29427—3006<

近日公開予定!!

「・・・おい、エヴァンジェリン」

「な、何だ!?!」

「ネギと話するのが待ちきれないのはわかるが・・・もう少し落ち着け」

「ち、違うんだーーーーー!!!!!!」

こうご期待!!

外伝予告－反撃の刻印編－（後書き）

挿絵にする予定の画像をこのところ連続投稿しています。

なぜだ！？・・・ペンタブレット買ったからだよ！！

手書きより時間がかかりませんね、やっぱり！！

第一話 蒼い蝶と罪を背負う者（前書き）

反撃の刻印編スタート！！

お気に入り登録が一気に7人減って落ち込んだりした紅雷ですが、
負けません。

戦いは数ではないのだから！！

・・・すみません、調子乗ってました。土下座します。

第一話 蒼い蝶と罪を背負う者

千雨 side

—————目を覚ますと世界は一変していた。

・・・なんてことは中二病でもない限り思うことはないはずなのだが、今日という今日はそういう訳にもいかなかったようだ。

寝汗で汗だくになった体を冷やすためにシャワー室へと入り込んだ私は当たり前のように少しぬるま湯のシャワーを出そうとしたのだが、何故か何度ノズルを捻っても一向に水は出ない。

水道管にトラブルでも発生したのかと思いきや寮長に事実確認しようと受話器を取った・・・のだが、今度は無音が耳を支配するだけだった。

「まったく、何だっていうんだよ・・・・・・・・」

昨日は徹夜して來未と盗まれたガイアメモリの搜索にあたったので寝不足気味の千雨は頬を膨らませ不満をあらわにする。結局見つかる事のなかった『サイクロン』の件は後日改めて搜索するということとで解散となったが、その無くなった経緯に不審な点が見られたため余計に彼女を苛立たせていた。

「・・・仕方ない、エヴァンジェリンに頼んで風呂でも貸してもら
うか」

別荘内なら水道管は関係ない。そう考えた千雨は携帯電話を取り出しエヴァにコールしようとした。しかし、視界に入った携帯のディスプレイの異常に凍りついてしまった。

なんと時計が動いていなかったのだ。それに付け加え「圏外」という二重コンボ。不幸連続版の影響ゲムをプレイしたわけでもないのに立て続けの不幸に苛まれた千雨は、部屋を飛び出し明日菜と木乃香の部屋へと向かった。

「くそ、二人に何かなければいいんだけどな!!」

もしかしたらどさくさに紛れて侵入した西の人間もしくは完全なる世界のメンバーが今の事態を引き起こしているのかもしれない思い込んだ千雨はその可能性を否定しきれないために明日菜から貰った合鍵で二人の部屋へと押し入る。

すると彼女の目に飛び込んできたのは新聞配達から帰ってきた明日菜と明日菜を迎える木乃香の・・・・・・微動だにしない姿だった。

————— 幾らなんでもおかしすぎる。

だって、明日菜のツインテールが宙を舞ったまま停止しているなん

て物理法則を無視しすぎだろう？

二人が無事なのは良かったとはいえ、これじゃあまるで時が止まったように見えるじゃないか………。

千雨が事の異常さを理解しかけていると、タイミングを見計らったかのように目の前を蒼く光る蝶は通り過ぎて行った。

「………また誰かが私を誘っているのか？」

あれはただの蝶ではない、明らかに魔法で創られた使い魔だ。

人間すら動けない中で誰かが自分を誘い出すために使い魔を放っている……つまり、もう一人この異常空間の中で動ける人間がいるということだ。

蝶の向う方向には女子中等部の校舎がある。蝶から感じる奇妙な感覚はその遥か上からより一層強く感じられ、目を凝らすとそこには黒服の怪しい女がこちらを見下ろすようにして佇んでいた。

『早く来るんだ、蒼崎千雨』
ミス・サウザンドレイン

「!？」

頭に声が響く。

胸が驚掴みにされるような背筋が凍りつくような感覚が体中を駆け巡りゾクリと震えさせる。

「つ．．．．．あ．．．」

それは数か月前、忘れもしないあの冬の日．．．わけもわからず遺跡で鎖に拘束され磔にされた時のあの――――

ダンッ！！！！

思い出したくもないあの出来事を地面を強く踏みつけることで千雨は無理矢理振り切った。

「お望み通り．．．行つてやるよ．．．！！」

几帳面に階段を登っていくよりもここから飛んで行った方が楽だという理由より、今の千雨には不愉快な気持ちにした女に一発喰らわせるという理由の方が遥かに上回っていた。

故に全力で全身を強化し弾丸の如く女へ向け飛び出し、そして――
――渾身の蹴りを叩き込んだ。

「．．．フッ♪」

「なあっ！？」

だが、蹴りは無残にも霞のように消えた女のせいで避けられてしまい、終いには背後に回られ左腕で首を固定され身動きが取れなくなつた。

「は、離せ！！こん畜生！！」

「・・・悪いけどそれは無理な話だ」

ただ単に拘束されたから千雨は抜け出そうとしているのではない。実は後ろから抱きしめるような形で拘束してきている女から香水ではない謎の香りが漂ってきているのだ。その香りは言い表すと「身体から抵抗しようという意思をなくさせる」といった感じの頭をボーンとさせる甘ったるい香りだ。

「・・・恐らくこの女は「きょたいほうこう挙体芳香」。

生まれながらにして一般の人とは違い普段の体臭または発汗の際に発する匂いが芳香である、世界三大美女の楊貴妃と同じ体質なのだろう。

徐々に私の身体は影響を受けて行き両腕がだらしなく垂れる。また、体格差もあつてかまるで母に抱きしめられている感覚さえ覚えた。

「別に貴女に危害を加えるつもりはないよ・・・ただ、少し聞いて欲しい話があつてね」

「・・・嘘、じゃ・・・ない・・・だろう・・・な？」

「当たり前じゃないか。わざわざ嘘をついて無駄な時間は使いたくないしね」

香りのせいで動かない体を察してくれたのか親切にも屋上のベンチに腰を下ろさせてくれた。……とりあえず敵意はないみたいだな。

「……で、何……なんだ……話って？」

「実はね……って、どうしてそんなに苦しそうなんだ？」

自覚ねえのかよ！？自分のそのミルクみtainな体臭が私を弱らせてるって！！

「自分の……身体を嗅いでみろよ」

「……あ、忘れてた。そういう事か」

急いで消臭スプレーを取り出すと浴びせかけるように彼女は匂いを消した。……正直、最初からそうしておいてほしかったよ。

「話を元に戻そう」

匂い対策を万全に整えた後にまだ始まってすらない話に戻そうとはこれ如何に？とは思ったがもう突っ込まないことにした。いちいち突っ込んだら時間がもったいないし。

「多分気づいているとは思うが、ガイアメモリを盗んだのは私だ」

「はい、盗難容疑で逮捕」

即座に手錠をリアルブートし手首にかける。

「・・・最後まで話を聴いてくれ」

「・・・どうせいい訳だろ？」

「違うな」

「違うな」

「違うな」

「違うな」

「違う」

「違うーなーい！」

??? side

「はあはあ・・・はあ・・・っ!!」

男は逃げていた。

いや、建前上は逃げているかもしれないのだが本当の理由では目指していた。

一体何処へ？

男が目指す場所、そこは犯罪者すらも学ぶ心があるならば受け入れるという魔法世界最大の学術都市《アリアドネー》だ。

何の為に？

それは偶然知り得た悲劇へのシナリオを一刻も早く伝えるためだ。

家族や友人を殺害したという容疑で逮捕されたこの男は6年もの間薄暗い小部屋の中で死刑を執行されることもなく監禁され続けた。

・・・理由は簡単で無期懲役判決を受けていたからである。他ならぬ陰謀を企む者によって。

陰謀に巻き込まれた彼は強化人間として体を改造され度重なる実験、同じように改造された者達の死を経験し続けた。

なかには正気を失い狂う者、洗脳され先立って逝った者もいた。

その中で彼は只管自我を守り続け、その実験計画のナンバー1の成
功体として登録されることとなった。

そしてネギがハイペリアにて実験体と戦い、ガトウが研究所を調査
していたその時間帯に彼は別の小さな町を攻略するために派遣され
ていた。・・・もつとも、その町へ向かう途中に輸送車を破壊し逃
亡を図ったわけだがその際に多少怪我を負ってしまった。

ちなみにその怪我は普通なら重症と判断されるほどのモノであり、
現に彼の腕や肩からはおびただしいと言ってもいいほど血が流れて
いた。

「ちっ・・・ヤバいな・・・」

応急処置は勿論した。だが、あくまでその場しのぎでありこのまま
では一般人と同じく危険な状態へとなってしまふ。

意識をしっかりと持ち、出来るだけ体に負担がかからないよう歩いて
いるとアリアドネー魔法学園の制服を着たボーイッシュな少女と紅
い旧世界の乗り物（確か、バイクだったな）をハンドルで押しなが
ら進む女性とも見えなくもない赤毛の少年が別の町ハイペリアから
続くアリアドネーへの道を進んでいた。

・・・どうやらここは町と町との道が合流する場所だったよ
うだ。

「本当にすみませんね、カナタさん・・・案内を頼んでしまつて」

「いいよ、別に。私も私用でセラス総長と話があつたし」

一方ネギは、目的通りアリアドネーをカナタを案内役として目指していた。

飛空艇で向かつても良かったらしいがカナタがケチった・・・じゃない、道を覚えながら歩いて行った方が今後の為になるだろうと言つたからだ。

「・・・・・・・・・・はあ」

「まだ気にしているのかい？あの子の事・・・」

「・・・ええ、まあ。どんな顔をして会えばいいんだろうって思ひましてね」

ガトウからの報告では保護された実験素体の彼女はナギのクローンであると同時に強化人間で、なおかつ正体不明の技を使い奇妙なことを口走っていたという。なんでもタカミチや明日菜さんの名前を

言っていたとかいないとか。

「ネギ君、その事はあるまい考えない方がいいよ。気にしすぎると話がややこしくなってしまうからね」

「・・・・・・・・・・そうですね」

詳しいことはアリアドネーに着き次第、千雨さん達と連絡を取って決めることにしよう。ここでウジウジしているのはもう止めだ。

—————今、ネギとあの女の子の口から聞こえたが・・・・・・・・・・まさか。

まさか俺が止められなかったあの事件の最大の被害者・・・・・・・・・・ネギ・スプリングフィールドじゃないだろうな！？
何故今魔法世界にいるんだ！？それに俺と同じようにアリアドネーを目指しているようだが一体・・・・・・・・・・ううっ！！

ここに来て傷口に激痛が走る。
激しい痛みが全身を駆け巡ると彼の口からSOSとも取れる呻き声が漏れた。

「ぐっ……ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ……!!」

地面に口から吐き出された血が飛び散る。

男の声にいち早くネギは気が付き背後を振り返るとすぐさま駆け寄った。

傷を見るからに大丈夫かと声をかける暇はなかった。

「何て傷だ……すぐに病院に運ばないと!!」

「……ッ!? (この男は……) ネギ君!! 此処からなら学園に行った方が早い!! バイクを出せるか!？」

「すぐに準備します!!」

ネギは男の治療をカナタに一先ず任せると、バイクのエンジンを吹かし速度計の上部に映し出されたオポジションパーツ表から要救助者運搬用の人一人が横に慣れるほどのカップセル型サイドカーを選択しバイク本体にドッキングさせる。

「カナタさん!! 乗って!!」

先にカナタを後ろにスタンバイさせると簡易治療を終えた男に人工呼吸器をつけカプセルに横にならせる。そして操縦席に飛び乗ると同時にハンドルを強く捻った！！

「しっかり掴まっててくださいよー！！」

「わかってる！！」

この時ネギは傷だらけの男・・・ラーツ・D・インデルシアに関わり助けたことでまさか違法実験体やMMN計画に続くMM元老院の恐るべき陰謀に巻き込まれることになるうとは思っていなかった。

s i d e
o u t

第一話 蒼い蝶と罪を背負う者（後書き）

この章が終わったら、原作開始するんだ！！

という何かのフラグはさておき。

次回予告

「彼を助けてくれてありがとう」

「結果的に俺はみんなを殺した、それは間違いじゃない・・・」

「君が・・・僕の・・・」

男が犯した罪、それは苦渋の決断の果てにあったものだった。

第二話　そして彼は真実へと迫り行く（前書き）

もう何も言うまい。

外伝はこの章で終わらせ、原作を開始する。

そのために高速執筆だ！！

第二話　そして彼は真実へと迫り行く

ネギ side

「後は我々に任せてくれたまえ」

「・・・・・・はい」

事前にセラス総長にアポを取っていたとはいえ怪我人を引き連れて入国とは本当に予想していなかった。

・・・・いや、予想できたら出来たで逆に怖いのだけれど。

ああ、ここにきて思うんだ・・・僕はトラブルメーカーなんじゃないかって。

行く先々でトラブルに巻き込まれるのってまるで某小学生名探偵と同じじゃないか。あっちはしょっちゅう人が死ぬし。

・・・さてよ、僕自身が問題を起こしていないのならメーカーではないのでは？

つまりはトラブル吸引体質・・・・・・その吸引力は驚きの強さ。

「僕はダイオン・・・ダイオン・・・ダイオン・・・ダイオン・・・ダイオン（ぶつぶつ）」

「何をブツブツ言っているんだい・・・ネギ君」

若干引いた顔でカナタはネギに声をかける。

「・・・いえ、何でもありません」

「そ、そうか。ならいいんだ」

い、いけない、自己嫌悪に陥っていた。何をやっているんだ僕は・・・

首を振り雑念を払うとカナタの後ろからいかにもガリ勉そうな眼鏡をかけた一人の男がやって来た。スーツ姿を見るからにこの教員だろうか？

「紹介しよう、ここで世界史の教師をしているリテラ・スフェニー先生だ」

「初めまして、ネギ君。総長から詳しい話は伺っています」

「こちらこそ初めまして。こんな時期に時間を取って頂きありがとうございます
うございます」

簡単な挨拶と共に握手をすると、リテラはラーツが運ばれていった手術室の方をじっと見つめ再びネギに視線を戻した。

「突然ですみませんが・・・彼を助けていただいてありがとうございます」

「え、もしかしてお知り合いだったんですか？」

「・・・ええ。MM元老院に所属していた時の同僚でね、何度も語り合った仲です」

「そうでしたか・・・」

でも、それだけじゃないような気がする。もっと深い事情か何かがありそうだ。

その疑問に対する答えを顔で察してくれたカナタが受け答える。

「実はねネギ君・・・ラーツ・D・インデルシアは6年ほど前に家族殺しの罪で逮捕されていたんだ」

「・・・え？」

「家族だけに飽き足らず幼馴染まで手をかけ、その結果彼は無期懲役の判決を受けた。・・・だけどね」

カナタはリテラに続きの言葉を引き継がせる。

「彼は『殺した』んじゃない。・・・『殺させ』られたんだ」

「ど・・・どういう事ですか!？」

自分の意志で殺したという訳じゃないのか!？

「・・・事の発端は6年前、あいつがある一派が進めていた旧世界の村を襲撃する計画を知った時だった」

旧世界の村を襲撃・・・!? しかも6年前ってまさかあの冬の日、父さんが来てくれなかったら確実に殺されていたあの――――

「襲撃計画って、僕の故郷を悪魔達が襲った事件の事ですか!？」

「そうだよ・・・偶然、襲撃計画を知ったあいつは当然阻止しようとした。・・・だけど、そう簡単に阻止できるものではなかったんだよ」

その果てにあったのは、家族や友人（幼馴染）に対する呪い。

不治の病ともいえる永久呪文をかけられてしまった彼らは苦しみながらこうラーツに言ったそうだ。

『私達の血でその手を汚そうとも・・・自分の正義を最後まで貫け』と。

『貴方を私は恨まない・・・だから、お願い』と。

「事件後、私は何度か面会を許された。そしてその時モールス信号でこう伝えられたんだ『襲撃された村の森を調べろ』ってね」

阻止が不可能だと分かっててもラーツは諦めなかった。彼はせめて悪魔が召喚されたという証拠を残そうと考えたのだ。

「丁度その後にメルディアナに出張することになっていたから、途中密かに調べたんだ」

解析魔法が得意なりテラは見事ラーツの依頼通り証拠を入手した。
しかし、そのままMM元老院にいるのは危険だと考えた彼は学生時代
に取得していた教員免許を利用して中立の学術都市アリアドネー
の魔法学園に就職し今に至った。

「ラーツとはその後連絡が途絶していたから心配していたんだ。こ
んな経緯で再会することになるとは思わなかったけれど、嬉しいよ」

「リテラさん……」

6年前に事件の裏にそんな出来事があったなんて知らなかった。

知らないうちに僕を、僕達の村を守ろうとしていた人がいたなんて
知らなかった。

真実を闇に葬り去るのを阻止してくれていた人がいたなんて知らな
かった。

ならば、僕はどうすればいいのか？

その知らないうちにMM元老院と戦っていた人達の期待に応えたい。
努力を無駄にさせたくない。命を守りたい。

———だから、MM元老院は……

僕が潰す!!!!!!

side
out

————二日後。

リボルギャリーに乗ってガトウと夕子、そして研究所で保護された謎の少女がアリアドネーに到着した。

「お待ちしてましたガトウさん、夕子さん」

「おう、ネギ。待たせたな」

「久しぶり、ネギ君」

こうして三人が揃うのは数か月ぶりだ。

以前は時計塔内で《ターミナル》が開いた会議の中で出会い、魔法世界の動向などについて話し合ったりしていた。無論、その場には千雨も参加しておりネギの魔法世界においてのパイプ作りを提案し今回の魔法世界遠征の全面的サポートを引き受けていた。

「到着して早々ですみませんが、【例の件】で千雨さんと回線が繋がっています。すぐに来てくれませんか？」

「・・・ああ、わかってる。明石、嬢ちゃんの事は暫く頼んだぞ」

「はーい、了解♪」

例の件とは紛れもなく保護した少女の事だ。

研究所で起こったことの説明や謎の魔法行使技術、知る筈のない名前など話さなければならぬことは山ほどある。

夕子の背におんぶされて眠る彼女の顔をちらりとネギは覗き見る。
まだその幼さの残る顔には何処か悲しみめいたものを感じた。それに付け加え――――

「・・・っ!!・・・また頭痛か」

彼女に近づく度に電流ように痛みが頭へと走り、そのまま触れてしまえばさらに苦しくなりそうだ。

額を押え痛みをこらえるとネギはガトウを麻帆良学園にいる千雨と通信が繋がっている待合室へ案内した。

千雨side

「————なるほどな、MM元老院はそこまで計画を進めていたのか」

ネギとガトウさんから遭遇した実験体と制圧した研究施設の話聴いた私はこめかみに手を当て思考する。

・・・正直、想定していたMM元老院の現状を遥かに超えていた内

容だった。

てつきり未開拓の地に生息する強力な魔法生物でも捕らえて使役したり、手当たり次第にネギの村のように悪魔を召喚して襲撃していると思っていたのだが・・・違法実験体に強化人間とはなあ。呆れて何も言えないわ。

念のために仮契約をしておいたが両者とも役に立ったそうで何よりだけど、これからの戦いはこの分だと激戦になりそうだな。強化ツールやアイテムの開発に着手しないと多分不味いかな。

「支援物資の方は後々考えておくよ。こっちも何かと忙しいからな」

9月から短期（もしかしたら長期）の任務が入るから色々準備しないといけないことがあるし、依頼主とのやり取りに時間がある。夏だっていうのに何で私達はこうも働き尽くめなんだろうね？

『ありがとうございます。・・・それで、先程話した正体不明の魔法行使技術の件なんですが――――』

「その事なら専門家に聞いた方が早いと思ってな、エヴァンジェリオンを呼んであるよ」

そもそも今いる場所がエヴァンジェリンの別荘内なんだがな。で、今エヴァンジェリンが何をしているかと言えば・・・・・・・・

絶賛お着換え中です!!

「おい、エヴァンジェリンまだか？」

『ちょ、ちょっと待て!! 今髪を整えている所なんだ、すぐに終わる!!』

なんとエヴァンジェリン、ナギの息子であるネギが以前自分を擁護するようなことや魔力抑制の呪いを解呪しに行くと言った真顔・・・しかも告白と勘違いされるような言い方で言うもんだから若干惚れてしまったらしい。

その際にナギが生存していることを伝えたようだが、まあその時のエヴァンジェリンの奴はそれどころじゃなかった。・・・後で私が強く言っただけどさ、どうか。

まったくやれやれ、自分より遥かに年上の人間の心配にこんなに苦労が掛かるとは・・・はぁ。

眼を細めて横を向き溜息をつくときバタバタと足音が聞こえる。問題の人物はようやく出てきてくれたようだ。

>i29626—3006<

「すまない、待たせてしまったな・・・私がエヴァンジェリ

ンだ」

「嘘つけ」

ソファアの隣に座っていたのはいつものツルペタロリボディのエヴァンジェリンではなかった。

そこにはYシャツの前を胸を強調するように開きフリルが付いたタイトなスカートをはいた金髪のOL嬢がいたのだ。

『・・・・・・・・（ごくりっ）』

「・・・ネギ、何でここで生唾飲み込んだんだ？」

『い、いえ何もしてませんよ？』

その反応からしてすっかり誘惑されているじゃんか・・・明日菜がいたらこりゃ危なかったな、おい。

「さてと・・・アンタの色仕掛けもここまでだ。年齢詐称薬は解除させてもらうぞ」

「ふふん・・・やれるものならやってみるがいいさ!!」

えらく自信だな。ならば私は・・・全力で解除チョーーーーー

ツプ!!

掌に解呪のルーンを刻み込みエヴァの後頭部目掛けて手刀を叩き込む千雨。だが、その一撃は当たったのも関わらず何も効果を現さなかった!!

「何だと!? 前は確かに解除できたのに……!!」

「バカか貴様は。そう何度も同じ方法でやられたりするものか」

だからって何も起こらないのはおかしい。これは年齢詐称薬を使った変身じゃないのか? だとすると自分に強力な呪いでもかけて……いやいや、いくら何でも自分でそんな事したら今後の学園生活はどうなる。

……ん? 強力な……呪い?

「アンタまさか……影響ゲームで!!」

「そうだ!! お前と神楽坂が修行している間にな、茶々丸とチャチャゼロとやっていたんだよ!!」

そしてエヴァは引き当てたのだ!! 『牛乳を飲むと一定時間グラマラスなお姉さんに変身する』という都市伝説的な永久の呪いを!!

『……初めから狙ってやったんだな』

「そうだ！！確実にその呪いのマスを踏むために陰ながら血の滲む努力をして、やっとの思いで踏んだのだ！！」

すべてはネギを誘惑するために！！

「ダメだコイツ・・・早く何とかしないと・・・」

『ハハハ・・・（頑張ってください、千雨さん・・・）』

そして話は本題へと戻る。

「————で、その問題の魔法行使技術とやらの映像はあるのか？」

先程とはうって変わって妖艶な雰囲気ミステリアスを醸し出しながらエヴァはネギとガトウに問う。

600年も生きた今知る限りで最古で最強の魔法使いをモニター越しに前にし二人は頷き合うと一つの映像を表示した。

『・・・はい。これが唯一ガトウさんが目撃することができた彼女の魔法行使です』

映し出されたのはガトウと夕子に初めて姿を直接見せた時の映像だ。地下ブロックを塞いでしまっていたコンクリートの残骸は粉々に砕け散り、周囲は炎の海と化している。そんな中で一人佇むのは両腕と顔面に謎の黒き紋章を浮かび上がらせ・・・そして全身を黒き炎で纏っているナギとネギに似た少女だった。

「な・・・こ、これは・・・闇の魔法！？」
マギア・エレベア

「知ってるのかエヴァンジェリン？」

「知ってるも何もない！！これは私が開発した技法だぞ！？何故見ず知らずのガキが使っているんだ！？」

・・・なんてこった、正体不明の技法がまさかエヴァンジェリン印のモノだったとは。

だが謎は残る。聞くところによると今、闇の魔法を覚えようとするならば隠居中で行方不明のジャック・ラカンスクロールの下にある巻物を使うか、もしくは本人に習わなくてはならないそうだ。

だとすると、MM元老院の研究所の実験素体でどちらにも行くことがなかった彼女が使えるのは矛盾が生じる。

「まさかどこぞの輩が私の技法を真似したんじゃないだろうな？」

「人間を人外に変える技法だもんな・・・ありえなくもないか」

ならば今後の戦いは闇の魔法を意識して戦わないといけなくなるのか？そう不安に思っているとネギは口を挿んでこう言った。

『いえ、エヴァンジェリンさんの技法をMM元老院が真似したというのは100%ありえないと思います』

「どうしてそう思うんだ？」

『・・・これを見てください』

次に表示されたのは夕子がまとめた【MMN-01】から【MMN-08】までの実験内容に関するレポートだった。

『01から順に見ていきますと、単なる身体強化や魔力増幅措置、レアスキル開発などが実験の主なものなんです。しかし、その中にエヴァンジェリンさんの技法に関する文章それに準ずるものが見当たらないんですよ』

「普通なら最初・・・または途中から取り入れて08、つまり問題のガキに習得させるような前提があるはず・・・と言いたいんだな？」

『ええ、そうです。それに身体に異常がないか念のために夕子さんが調べてみたらしいんですが……』

実験内容と明らかに食い違う点が見つかった。なんと彼女の身体は真祖の吸血鬼と化していたのだ。

『……残念ながら、これはもう俺達の一般常識で語りきれることじゃないらしいぜ』

「……そう、みたいですネ」

魔法使いの一般常識が通用しないとなるとやはり出てくるのが魔術師としての一般常識か……。

だが、これほどの異常事態を引き起こすようなケースなんて早々ないよな？

———そう思った矢先だった。

『千雨さん、エヴァンジェリンさん、ガトウさん。……これは僕のおくまで仮説なんですがいいですか？』

『別にいいが……』

「ん？」

「・・・言ってみろネギ」

いつになく重苦しい雰囲気放つネギ。

その圧迫感に押されながらも私は真剣に聞いてみることにした。

『-----彼女はおそらく、

僕の【同一^{かのうせい}存在】だと思っんです』

・・・そのネギの提示した可能性に私達はすぐに言葉を続けることができた。

side
out

第二話　そして彼は真実へと迫り行く（後書き）

次回、反撃の刻印編。

「平行世界の同一存在？」

「本当の私を見せてあげる・・・」

「何て事を・・・！！！」

—————また、僕には守らないといけない存在がその日できたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0823w/>

アリアドネー戦記2002(外伝 千の雨を越えて・・・)

2011年8月24日07時26分発行